325
35

ンチスガウア

懺悔録

宮崎八百吉譯

宮城縣図書館藏

懺悔錄

明治
40 12 19
内交

聖アウガスチン小傳

「基督教會」に於ける最大の拉甸師父聖アウガスチンは紀元三百五十四年九月十三日、亞非利加ヌミデヤ國の一小市タガステに生る。父はパトリシアスと曰へる市民、母はモニカと曰へる敬虔なる婦人なり。彼は幼にして穎悟、體格も亦壯健なりき。十六歳にして其學力既に時の大學に入るに適せしかば、其父パトリシアス勤儉貯蓄して其の學資を作り、之をカルセージ大學に遣りぬ、修辭學に造詣せしめて耐能なる演說家と彼を爲さんが爲なり。彼カルセージに在りし間、才學共に非常に長進し、恒に儕輩の首位を占めたり。同時に淫佚放蕩の生活に耽溺し、十八歳にして一少女を蓄へて妾となし、爾來十四年間之を愛して同栖し、之に一子を生ませたり。後彼妻を娶らんとして之を放ちしとき、此の女は彼に再び男を知らじと誓ひて別れぬ。アウガスチンも爲に

自ら「生血滴たる痛傷」と云ふ所の決裂の劇痛を感じぬ。

彼二十歳にしてシセロの「ホーテンシャス」を讀み、「智慧」の不朽なることを啓發せられ、俄に之に對する饑渴を覺え、之を滿足させんが爲大に聖書を研究すべしと、繙いて之を讀みしに、其の文體の平俗なることシセロの莊嚴に敵せざりしかば、絶望して之を拋ち、心大に窮せし際、マニ教の教師に遭遇せしかば、忽ち其の迷信に陷り、九年間之に留まりき。

彼が其の鄉邑タガステに於て始めて修辭學の教場を開きしは、亦此の二十歳の時なりき。此處に在りて成効無くばあらざりしかども、彼は初よりカルセージに於て其の名聲を興さんと慾望したりしかば、遂に茲の地に於て學校を開きぬ。多數の學生彼の教場に聚り來れり。彼は更に修辭上の懸賞論文に當選して大名を博しぬ。然れども彼は此の地の學生の横暴にして訓錬を欲けるを惡み、去りて羅馬に往きたるが、此處にても學生等亦連合して教師に逼り、月謝を納るゝこと遁るゝ

に遭ひ、再び去つて、市費を以て、修辭學の教師を待遇する所のミランに往けり。

彼のカルセージに在りし間、マニ教に對して數種の疑團を懷き、其の派の領袖ファウストの來るに遭ひ、之に就て其の疑問を提出して、忽ち其の無學なるに失望し、爾來、其の宗教問題を曖昧に葬り居りしが、此の地に來りて、監督アムブロースの説教を聞くに及び、大に悟る所あり、再び聖書の研窮に從ひ、殊にパウロの書翰を讀み、大に決する所あらんとして而も決する能はず、日又一日尙且肉慾と世望とを追ひ求めぬ。彼此地にて結婚齡より二年少かき一少女と許約し、爲に此時既に此地に來りて彼と同に居りたりし母モニカ、彼の悔改救拯の爲め殆と二十年一日の如く熱祈し來れる母モニカの命に由りて、第一の妾を去りて其の鄉國亞非利加に還したりしが、二年間の空虛を堪ふる能はず、再び第二の妾を買ひたりき。然るに一朝其の同鄉人にして熱心なる基督信者

ポンチシアナスより、埃及の僧聖アントニーが「往て汝の所有を售りて貧者に施し而して來りて我に從へ」と言へる基督の命令の如く實行し、去つて彼に從ひし事實を聞き、己に對して痛憤を發し、一夕劃切なる自己譴責の念に駈られて、其の矯居に對かへる花園の寂寞なる一隅に趨り、辭を揚げて其の罪の爲に哭き、將に執らんとする獨身生活の爲に哭き、茲に始めて福音の光の中に身を投じぬ。事は詳に本文中に具れり。

茲に於て彼は三百八十七年の春、復活祭の夕、其子アデオデタスと沒式を受け、修辭學教授の職を辭し、其の鄉里に於て神に仕へんと、母を伴ひて亞非利加に返らんとする途中、タイバー河の畔オスシアの逆旅に在りしとき、母モニカ大なる滿足を懷いて永眠に就きぬ。

彼其の鄉里タガステに歸りて、幾も無く、三百九十一年アルゼリアとチニスとの境に接近せる、一小市ヒッポ、レヂアアスの基督信者の團體、彼を招聘して强て按手禮を受けしめたり。未だ五年ならずして、其地

の監督ヴレリアス彼を擧げて己の同僚となし、ヴレリアス死するに及んで、彼其の位置を承けて生涯に及べり。アデオデタスは疾く彼に先ちて歿しぬ。彼は四百二十九年ヴンダルス族の亞非利加に侵入し、四百三十年其のヒッポ市を圍むを見るに及びき。越へて三月、同年八月二十八日此の著名なる神の人は其の最後の息を引き畢りぬ。

彼が基督王國の精神界を通して最も深き印象を與へたる事は、吾人の言を待たざるなり。彼は聖書の註解の外、書翰、又は多く哲學的、神學的著述を作せり。中に就て最も遍く知られたるは、「神の市」と、此の「懺悔錄」なりとす。「懺悔錄」は彼の思想と感情、罪惡と煩悶、敗亡と躊躇、及び最後の大悔改の歷史なりとす。彼は文章家としては屢冗舌の弊に陷るの嫌ありといへども、然も遂に不朽の金言を吐露し出さずんば已まざりき。此の書はパンヤンの「天路歷程」と、パスカルの「冥想」と、併せて基督教文學の三寶典と稱せられて、英語に於ても獨語に於ても、數種に譯せら

れて世に行はれぬ。我が此の重譯は神學博士ビッグ氏の英譯に據れる物なり。

譯者識す

譯者自序

嗚呼是れ不朽の名什聖アウガスチンの懺悔錄の翻譯なる乎、平素の親炙あるにもあらで、俄に唯二個月の短時間を以て、此の大文學を譯せりと云ふは、我が慚愧に任へざる所なり。我は他の懺悔錄を譯して、正に我が懺悔錄を著はせるなり。然も是れ社會の待望、書舗の要求、譯者自身の境遇、相合して然らしめたるなり、浩嘆に勝ふべけんや。

我既に言ふ、平生の親炙あるに非ずして唯二個月に譯了せりと。盛夏、六月、七月の間、一切人事を謝絕して書齊に籠居し、一閑張の机に對し、原書を左にし、硯を右にし、眼字を追ひ、頭之を譯し、手筆を駈る、額上の汗落ちて紙上に點するも、三伏の熱身邊に在るを知らざるなり、書籍製造(ブックメーキング)の業此に至つて滑稽を極めたりと謂ふべし。而も此の大文學を執りて吾が書籍製造の犧牲に供したるの罪は、作者に對し、讀書社會に對して、

言辭の推敲すべき無し。唯神に向ひて告白せる間に、猶往々諧謔的口吻を交へて人を笑はしむる所の作者自身の寛大、或は我が此の滑稽を恕するあらん乎。偏に恐る、卒爾なる譯筆、錯誤、遺脫極めて之あらんことなり。願くは版を重ぬるに從ひて、漸次完璧を成すを期せんのみ。

本書の價値、又其の宗教文學界に於ける位置は、前に掲げたる小傳中に具したれば、今復た述べず。我が此の譯書は、其の文章を傳ふるに足らずといへども、其の精神の幾分は之を寫したらんと信ず。更に之を時代的著述として見るときは、教會歷史に顯はれざる所の許多の歷史的事實を發見す。今其の主なる一二を擧ぐれば、使徒時代の奇蹟猶ほ此の四世紀まで繼續したりし事、沒式(バプテスマ)が救拯的沒式(セーヒングバプテスマ)と稱せられ、之を受けざる間は罪の赦罪を受けざるものと聖書的に信じたる事(九篇第四章、同第十三章)、聖書未だ章句に割斷せられざりし事等なり。是れ讀者の注意を遁るべからざる物なり。其他內面的見神、惡の原因に對する其の領悟及び之が解釋等、如何に希臘哲學思想が當時の基督教神學に影響したりしことかと云ふことを見るべし。

嗚呼我不學不文、固より以て此の大著述に當るに足らず、此の如きは之を後世の天才に讓り、我は時代の急需に應じて、聊か隗より始むと云ふのみ。大方其れ吾が心を諒せよ。

明治四十年十一月十六日

風物蕭條たる書齋に於て　宮崎八百吉

聖アウガスチン懺悔錄目次

第一篇

アウガスチン、主の名を喚んで其の生涯の發端を叙せり。彼は其の幼年と少年の犯罪を認め、己當時勉學よりも遊戯又小兒の娯樂を好愛したりしことを告白す。

第二篇

彼次期の生活に進入して、家庭に於ける壓制的痴戯、肉慾、娯樂の爲に費したる其の青春の初年を、衷心より告白し、其の伴侶と與に行ひし痴愚に對して、嚴酷なる宣告を下せり。

第三篇

彼其の文學研究の爲、カルセージに在りし時過ぐせし其青春時代を語る。此の時期の間彼如何に不潔なる戀愛の圈套に係りしか、又マニ教の異端に墮せしかを告白す。彼は明瞭に此派の虚妄と其の誤謬を論ず。彼其の母

の血涙と、神の彼女に爲したまひし約束、即ち彼の眞理に取り回さるべき約束とを語る。

第四篇

彼其の九年間マニ教に屬し他を誘ひて同一虛妄に歸せしめしことを懺悔し、彼其の非常の沈痛を以て哭きし所の友人の死に機會を得て、眞友と僞友の間の差別を明にす。彼又美と適應に關する著述を爲し、又アリストートルの「範疇」又世間的藝術の教科書を、其の二十歲の齡に於て、教師を待たずして容易に之を解し得たることを語る。

第五篇

彼其の二十九歲の事を記せり。彼茲の年に於てマニ教徒ファウストの淺薄を發見して、其の宗派に遣詣すべき目的を棄てたり。彼此の年に於て羅馬の修辭學教授に撰任せられ、羅馬より同じ職務を執る爲にミランに遣はされたり。茲にて彼はアムブロースの說教を聞き、俄然其の心眼を啓くに至り、遂に心を決してマニ教を棄て、再び試驗生(カテキュマン)沒式を受くる準備に服する者となれり。

第六篇

此篇に於て彼はモニカのミランに到來せしと、其の三十の齡に及んでマニ教の頑梗に攻擊したりし正統的眞理を、アムブロースの說教に由りて氷解せしことを語り、次で其の友人アリピアスの性格及び己と子プリヂアスとの知遇を記し、又斬新向上の生活の思想が投射したる精神的痛苦を自白し、死と審判の恐怖と日々に己を改悔に近づかしむることを告ぐ。

第七篇

彼其の壯年の發端、即ち其の三十歲の事實を回顧し、當時に於ける其の無智の暗黑如何に前よりも深厚なりしか、又神の性質に關する諸の誤解、惡の起原に關する許多の淺ましき昏惑を經過して、遂に如何にして神に關する正當なる智識に達したりし乎を語る。唯猶主キリストに就て、無垢の議論を主張せしのみ。

第八篇

彼茲に其の生涯の最も著名なる時期即ち其の三十二歲に達せり。此年や

彼シムプリシアナスよりビクトリナスの改心譯を聞き、ポンチシアナスよりアントニーの一代記を聞き、肉と靈との猛烈なる苦鬪を經て後、終に天よりの聲に聽從ひて眼を彼使徒の聖書に曝し、其の全心を倍善の道に轉じ、完に全く神に歸依するに至る。

第九篇

彼茲に其の修辭學の教授を辭すべき心を決し、之を來らんとする葡萄收穫祭まで延期せしことを語り、次で彼其の友人、エレカンダスの別莊に於ける其の退隱と、其の沒式（バプテスマ）と、其の母モニカの德操と及び其の死とを語る、是は彼の沒式を受けし後同じ年の內に起れり、即ちアウガスチンの三十三歲の時なり。

聖アウガスチン懺悔録目次　大尾

第一篇

アウガスチン、主の名を喚んで其の生涯の發端を叙せり。彼は其の幼年と少年の犯罪を認め、己當時勉學よりも遊戯又小兒の娯樂を好愛したりしことを告白す。

第一章

彼神に導かれて神を美はめんとし、又祈禱、讃美に先つべき乎、讃美、祈禱に先つべきかを考ふ。

大なる哉嗚呼爾主よ爾は至く頌むべき、哉。大なる哉爾の威能や、爾の智慧は量無し。人は爾の創造物なるが故に爾を頌むべし。實に然り、人は——己と倶に其の死亡と其の罪性の證左と、爾が高慢者を拒みたまふ其の證左とを帶べりといへども、——尙且人は其の爾の創造物の一なるが故に爾を頌むべし。爾我等を導きて爾を美むるを樂ませた

アウガスチン懺悔錄

まへり。蓋は爾我等を爾己の爲に造りたまふ同時に、又我等の衷情は爾に於て安息するまでは安息を得ざるが故なり。主願くは我を容して爾を喚ぶことゝ、爾を美むることゝ何か先つべき乎、又爾を知ることゝ爾を喚ぶことゝ、何か先づべき乎を知り、且悟ることを得しめたまへ。然りといへども爾を知らざる者にして、誰か爾を喚ぶことを得ん乎。蓋は爾を知らざる者は其れ爾の名に非ざる名を以て爾を喚ばん。若くは我等は爾を知らんが爲に爾を喚ばざる可からざる乎。尙且彼等は如何にして其の未だ信せざる者を喚ぶべけん乎。且夫彼等は如何にして宣ぶる者無きに信ずべけん乎。曰く彼等は必ずや主を求めんが爲に彼を美めざる可からざるなり。何となれば求むる者は彼に遇ふべく、遇ひし者は彼を美むべければなり。嗚呼主よ願くは我をして喚んで爾を求めしめよ、信じて爾を喚ばしめよ。蓋は爾既に我等に宣べられたればなり。爾を喚ぶは吾が信なり。嗚呼主よ吾が信は是れ

即ち爾其の子の人性に由り、爾の宣敎者(共に耶蘇基督を指す)に由りて灌ぎし所の物なり。

第二章

彼其の斷る所の神、己の內に在ること、己亦神の內に在ることを認む。

嗚呼我如何にして吾が神を喚び、之を吾が神、吾が主と曰ふべき。蓋は我が彼を喚ぶに當つて、我は實際彼を喚んで吾が內に入れんとすればなり。吾が內に如何なる位置ありて吾が神之に來るを得べき乎。神即ち天地を造りし神、能く來つて吾が內に住みたまふ乎。嗚呼吾が神吾が內に能く爾を保つべき何物あり乎。否、天地すらも——是れ爾の造る所、而して爾我を其內に造れり——豈爾を保つを得ん乎。若くは一切萬物は果して爾を保てり乎。何となれば一切萬物は爾無

くんば一も之有るを得ざればなり。然らば則ち我は何が故に爾我に入りたまへと祈る乎、我亦此く在るを見ればなり。蓋は若し爾我に在ること無ければ、我亦在るべからざればなり。我は陰府に在らず、設し在りとも爾亦其處に在らん。蓋は我陰府に降り往くとも、爾は此處に在ればなり。嗚呼吾が神然らば則ち爾吾が內に在らずんば、我は正に在るべからず。然り竟に在るべからず。若くは寧此く謂ふべし、若し我萬物を出し、萬物を維ぎ、萬物を攝むる所の爾の內に在らずんば我は正に在るべからずと。正に然り、主よ、正に然り。然らば我何處に爾を喚ばん乎、我斯く爾に在るを見ればなり。將又爾は何處より我に來る乎、蓋は我天地の彼方、何の處に飛び往きて、我天地を充たせりと曰ふ所の吾が神の、其處より我に來らんことを望むを得ん乎。

第三章

神は畢竟處所に在り、而も何等神の全體を保つ物有る無し。

天地は爾が之を充すが故に果して爾を保てり乎。若くは天地は爾を保たざるが故に爾は之を充して猶溢れたり乎。天地の充たさるゝに當りて、爾は何處に溢れたりや。若くは爾は一切を保つが故に己を保つべき何等の限界をも要せざる乎。蓋は爾が充たす所は、保つに由りて充すが故なり。爾の充ちたる器皿は爾を限りたるに非ず。此等の物は粉碎せんも、爾は注ぎ出さるゝこと有らじ。爾の我等の上に注がるゝや爾の墮落したるに非ず、我等が高擧せられたるのみ。爾は我等を聚むれども、而も散らされたるに非ず。然れども爾萬物を充すに當りて、爾は己の全體を擧げて之を充す乎。

若くは萬物は爾の全體を保たざるが故に、是は爾の一分を受け、而して

萬物同時に同分を受けたり乎。若くは各己の分を受けたり乎。即ち大物は大分を受け、小物は小分を受けたり乎。然らば則ち爾の一分は大にして又一分は小なる乎。若くは何等爾の全體を受けたる物無しとは云へ、爾は畢竟隨處に在り乎。

第四章

神の威嚴、又其の完全の不磨なること。

吾が神よ然らば爾は果して何ぞや。我問ふ爾は主たる神に非ずして何ぞや。何となれば主の外何等の神あり乎。又我等の神の外何等の主ある乎。至高、至善、至能、全能、至仁、至公、至遠なれども至近なり、至美なれども至剛なり、安定すれども不可思議なり、變らざれども一切を變へ、新ならざれども陳びること無く、萬物を更むれども高ぶる者を老衰に

歸せしむ、彼等之れを知ることなし。恒に作(はたら)けども恒に息み、恒に聚むれども乏きこと無く、恒に保ち、恒に充たし、恒に護り、恒に創造し、恒に滋養し、恒に成就せり。爾は虧くる所無けれども、恒に索めて止むこと無し。

爾の愛は情慾なき愛、其の嫉妬は驚愕なき嫉妬、其の悔改は悲哀なき悔改、其の憤怒は錯亂なき憤怒なり。爾は其の工を變ふれども、其の謨を變ふること無し。爾は其の得る所を取れども、喪ふ所あるに非ず。貧からざれども獲ることを樂しむ。貪るに非れども利を加へて取る。人は爾に貸さんとして爾が求むるよりも多くを與ふれども、誰か爾の物ならざる物を有せん乎。爾は己の負はざる負債を償ひ、負債を宥して失ふ所なし。嗚呼吾が神、吾が生命、吾が聖なる歡喜よ。我復た何を言ふを得ん乎、人爾の事を宣ぶるに當りて、正に何を言ふことを得んや。禍なる哉爾を美めぬ輩や。蓋は爾を美むるに最も妙なる者といへど

も、暗啞に異る無ければなり。

第五章

彼神の愛と、其の犯罪の宥恕の爲に祈る。

我が爾と和するを得んが爲、爾の吾が心に入りて之を沈醉せしめんが爲、我吾が罪惡を忘れて吾が惟一の善にて在します爾に觸るを得んが爲、此の賜を我に容す者は誰ぞ乎。爾は我に誰なり乎、我が之を語り得るやう我を憫みたまへ、我は爾に誰なれば爾は若(しか)く我を愛し、我に爾を愛せしめ、一旦爾を遺るれば、爾我を憤りて我を嚇すに言ふべからざる禍患を以てしたまふ乎。我爾を愛せざるか——其事自身既(すで)に大なる禍患に非ず乎。嗚呼主吾が神願くは爾の慈愛の故に我に告げよ、爾は我に誰なり乎。願くは吾が靈魂に告げて曰ひたまへ、我は爾の救拯なりと。願くは爾之れを語りて我をして聽かしめたまへ。見よ爾の前に吾が靈魂の耳傾く、嗚呼主爾之を啓きて吾が靈魂に囁きたまへ、我は爾の救拯なりと。然らば我は其の聲を索め、往きて爾の裳を捉へん。慈顏を我より隱す勿れ、我をして死せざるやう死に入らしめよ。我を

して慈顏を拜するを得せしめよ。

吾が靈魂の家は狹し、願くは爾之を廓きて內に入りたまはんことを。是は既に敗れたり、願くは之を修(つくろ)ひたまはんことを。是は爾を見ることを厭ふ、我之を告白す、我能く之を知る。然れど之を淨めん者は誰ぞ、爾に背きて誰にか此事を叫ばん乎。嗚呼主よ我を密かなる愆より淨め、爾の僕を知らざる罪より釋したまへ。我信ず、是故に我語る。嗚呼主よ爾は知しめす、我吾が心惑ふまでに吾が罪を告白せざりし乎。而(かく)て爾吾が心念の不義を宥したまへり。我審判に於て——眞理にて在します爾と論(あげつら)はず。我自ら欺くことを欲せず、吾が不義に不義を重ね

ざらん爲なり。我審判に於て爾と諍はじ、蓋は主よ若し爾偏く不義の行爲を認めたまはゞ、誰か能く立つことを得ん乎。

第六章

彼其の幼冲を叙し、神の遠慮と其の永切を美む。

然りといへども神よ願くは爾の慈悲の前に唯塵と灰とに外ならざる我を容して語らせたまへ。蓋は我己を嘲笑ふ人に語るに非ず、唯爾の慈悲に向ひて語るが故なり。爾も亦恐くは我を嘲笑ひたまはん。蓋は主吾が神、我が今言否、爾は必ず慈顔を轉し、慈愍を垂れたまはん。

はんと欲する所は何ぞや。其は我は何處よりして此の死すべき生命、又、我が之を稱ふべくんば、生ける死に來りし乎を知らずと曰ふ、此の一事の外無ければなり。我が肉の父母より聞しき如く、爾の慈愍の慰籍、

我を此の世に受け給へり。爾此の父母よりして、又此の父母に由つて、時に及んで我を型れり。蓋は我憶ひ興すこと無ければなり。而て人乳の餌養吾が爲に備ありき。蓋は吾が慈母、又乳母は自ら其の乳總を盈たせしに非ず、唯主、爾、彼等の方便に由りて、爾が廣く創造の極端まで溢れしめたまふ所の富瞻の中より爾の命令の如に、嬰兒の餌養を我に賜はりしが故なり。爾の恩寵は我をして爾の賜ふ所に滿足せしめ、吾が乳母をして爾の賜ふ物を欣んで我に享けしめたり。蓋は爾彼等に愛情を命じたまへば、彼等は之に由りて我を懷き、爾の富ませたまへる物を樂んで我に與へぬ。是は彼等にも善なりし故なり。吾が餌養彼等より溢れ來りぬ。而も彼等より來るに非ず、唯彼等に由りて來れるのみ。蓋は實は一切の物は神、爾より來り、吾が健康は獨吾が神より來るが故なり。我之を、後、爾吾が內に在し又外に在して、一切の恩惠を以て我を高らかに召びたまひし時に及んで悟りぬ。當時に在りては

我は唯乳總を含んで滿足を感じ、又肉の苦痛を啼くを得しのみ。此の外何等の事ある無し。後又我は笑ひ發め、先づ眠りて笑ひ、後覺めて笑ひたり。我は後之を聞きて信ぜり、何となれば我他の赤子を見るに、均しく之を爲せるが故なり。唯我は己の之を爲すこと如何なりしやを憶ひ興すこと能はざるのみ。

我は漸次に己の何處に在りしかを知るに至れり。我は吾が要求を、我に之を實たし得る人々に告げんと嘗みたりしが、能はざりき。是吾が要求は我が內に在るに、彼等は我が外に在り、且彼等我が心衷に入ること能はざるが故なり。是に於て我は吾が要求に適ふ運動、音聲、記號を行し、我が行し得る瑣少、即ち行し得る極善を行したり。然るに此等は實際吾が意味に適ひて居らざりき。我は人、我を解せざるが故に、若くは我を賊ふを欲せざるが故に、我に聽かざる時に當つて、我は老人を己に服せざるが故に怒り、自由民を吾が奴隸たらざるが故に怒り、之に報

ふるに涙を以てせりき。我赤子を見るに此の如し、我亦此の如くなりしなり。知る所なき赤子は知る所の吾が乳母に勝りて、我に吾が過去の事實を敎ふ。見よ吾が幼年は長く死したりしが、今生き來れり。然れども主よ爾は恒に活きたまへり。爾の中には嘗て何等死する物ある無し、――蓋は爾は時間の發らざりし前、一切「前」を喚ばるゝ物の在らざりし前、在まして、其の造りたまひし萬物の神又主にて在ます。爾の面前に於て代謝の原因牢く立ち、變化の源泉不變に流れ、非理的一時的の道理永劫活く。――嗚呼神我に告げたまへ、我爾に請ふ、願くは吾が不幸を憫み、我に告げて敎へたまへ、吾が幼冲の來るに先ち、他の吾が生命の死にたるか、若くは單だ吾が母の腹に在りて費したる生命のみなりし乎。蓋は之に就て或物の我に諷示するあり、我又婦の子を孕めるを見たればなり。

此以前果して何物有りしか。嗚呼吾が神吾が歡喜よ、我は嘗て何處に

在りし乎、我は嘗て何物なりし乎。我は何處にも之が解答に遭遇せざるなり。父よりも母よりも、他人の經驗よりも、自己の記臆よりも、何等の答辨を得ざるなり。嗚呼神よ爾我に爾を美めしめ、吾が知る事物の爲、己を爾に告白せしめながら、我が此の事を爾に問へば、爾我を嘲笑ひたまふ乎。嗚呼天地の主よ、我爾に告白せん、我我が記臆し能はざる所の吾が誕生と幼時の爲にも爾を美めん、爾能く人をして己の境遇に昔在りし事實を他人の運命より蒐聚せしめ、又己の事に就ては薄弱なる婦人の證徵にすらも信を取ることを得しめたまふ。我既に在りき。當時すら生きて在りき。而て幼冲が其の終を告ぐるに先ち、我は己の感情を他に示すべき記號を索めたり。嗚呼主よ此の驚異すべき生物は爾より來らずして何處より來りし乎。人豈己を造るを得ん乎。我等に注ぎ來れる所の生命の潮、生存の流は、豈他の源頭より引き出すを得ん乎。否主よ、生命の潮と存在の流と恒に常に平同なる所の爾、我等を

造れり。爾は最上生命、最上實在たるより外の何物にも非ざる故なり。爾は至高者、變りなき者。「今日」は爾の內に其の時間を竭すこと無し。而も時間は爾の內に己を竭す。蓋は一切の時間の刻は爾の內に在ればなり。若し爾一切之を保つ無くんば彼等(時間の刻)の馳せ行く道在る無し。爾の壽疆り無ければ、爾の壽は唯永へなる「今日」なり。吾が千日も、吾が父の萬日も、爾の「今日」の中を過ぎ去る。一切の日は皆爾の永刧より其の存在の模樣を承け、其の模樣に循ひて存しき。一切萬物又過ぎ去るべし、其の存在の模樣を承けて、其の模樣に循ひて存せん。唯其れ爾は平同なり。明日、及び凡其の後日の工、昨日、及び凡其の前日の工、爾「今日」之を爲すべし、爾「今日」之を成せり。人若し錯つて我が謂ふ所を失ふとも何の憂か有らん。彼又是は抑何なり乎(一)と曰へる間に又宜しく相俱に歡ぶべし。之を得て爾を喪ふよりも、之を失ひて爾を得ることを望むべきなり。

(一)譯者註、舊約出埃及記第十六章十三——十五節に曰く「朝に及びて露營の周圍に置きしが、其の置ける乾くに當りて、曠野の表に霜の如き小く圓き者地に在り、イスラエルの子孫を見て此は何ぞやと互に言ふ。蓋は其の何たるを知らざればなり。モーセ彼等に言けるは是はエホバが汝等の食とし與へたまふ所のパンなり」云々。是れ即ち謂はふるマナなり。記者蓋此のマナに屬ける語を取つて、之を己の神の觀念に引きたるなり。

第七章

幼時といへども罪無くんば有らず。

嗚呼神よ我に聽きたまへ、禍なる哉人倫の罪や。人斯く言はざる能はざるなり。爾は彼を憫みたまふ、蓋は爾彼を造れる故なり。然れど彼の罪を造らざりき。誰か我に吾が幼時の罪を告げ示し得る者ぞ。蓋は爾の面前に於て罪無き者無く、地の上に唯一日生きたる嬰兒すら之

る美食の爲に、然く貪り求むる所ありしならば、我は最も正當に笑はるべく又咎めらるべし。是故に我は當時に於てすら非難に價したり。唯習慣と道理が我が之を解する能はざりきと曰ふ故を以て、其の非難より我を救ひしのみ。蓋は吾人は人と成りて此の如き小兒の事を捨てたればなり。然れども我は未だ嘗て其の善なりと知る所の物を棄てゝ自ら改めんと試むる者あるを見ず。又吾人は動もすれば曰はんとす、曰く之を與ふれば唯害を爲すに過ぎざる物をも涙を以て逼り求むるも善し、自由者、老人、又兩親が即情に從ひて之に應ずまじきが故に、智者は容易く吾が所望と呼號に趨るまじきが故に、怒り狂ふも善し、吾人の暴意は其の聽かるれば己を賊ふに過ぎざれば、其の必ず聽かるまじきが故に、吾人は之を得んが爲に全力を以て攻擊を加へ毀害を以て逼らんと試みるも亦善し、是も亦一時なりと。若し然らば幼時の無罪は唯其の肢體の弱に賴る、其の德性に賴るに非らず。我は一赤子の

嫉妬に就いて親しく見て之を知る。彼口語る能はざるも、猶其の青ざめたる頬と、瞋恚の眼を以て、其の雙生兒なる他を睜れりき。是は世の普通に知る所、母や乳母は自ら此等罪過の爲に賠償を爲すと曰ふ。如何なる賠償なるか、唯彼等自ら能く知るあらんのみ。吾人は是〔嫉妬〕も亦無罪と謂ふべき乎。一方には乳漿の溢れ出る泉あり、他方には他の一兒が危ぶむべき缺乏の境に在り、其の生命の爲に唯此の一物に依賴するに當りて、何等他の競爭者を容さぬ事なり。然るに此等の罪過は固より罪過にして且つ重大なる罪過なりとは云へ、微笑を以て容舍せられぬ、其の時と俱に消滅するが故なり。然も猶此の容舍は正當に見ゆるが如きも、此等の事實が後年に至りて忍ぶべからざる物なるを思へ。是故に、幼兒に與ふるに吾人が見る所の生命と身體を以てし、備ふるに五官を以てし、聯ぬるに四肢を以てし、整ふるに形狀を以てし、其の完全と安全を得しむる爲に、具ふるに知的生活の一切の機能

を以てせる所の主、吾が神、是故に爾我をして爾を美め、爾に告白し爾の名を謠はしむ。嗚呼爾は至高者なり。蓋は爾は地に在る萬物の外、何等造る所なしといへども、全能にして至善の神なり。萬物は唯爾の外誰も造る能はざる所、唯爾より萬殊存在の模樣は來る。爾は至美にして萬物を美化し、爾の法は一切世界の法たるなり。是故に吾が幼冲、我之を記憶せず、我之を風聞に由りて始めて識り、僅に他の幼兒(精確なる推測の基礎)を觀察して、我が活きたりしと諷示さるゝ所の吾が幼冲を、我は謂ふ己が此の世に生きたる生涯の一部分として之を算ふることを厭ふと。蓋は此の幼冲の生活は、吾が母の腹にて過ぎし其に等しく、深く闇黑なる忘却の底に横はればなり。然れども若我不義の中に身まれ、吾が母罪に在りて我を其の腹に養ひたらんには、吾が神よ、我爾に請ふ、爾の僕なる我は何處に在りて、又何の時に無罪なりし乎。我今其の時を看過すべし。蓋は我復た其の途を跡くること能はざればなり。

我今之に對して何の爲すべき所ある乎。

第八章

童兒として彼如何に言語を學びし乎。

我吾が人生の旅行に於て、今幼冲より童年に來らざりし乎。否寧童年我が上に來りて幼冲に代りたるに非ず乎。幼冲は去らざりしなり(何となれば是れ將た何處に往くを得しぞ)。唯其の自ら已みたるのみ。我復た無言の幼兒に非ず、今は言ふ小兒なりき。我如何に言ふことを習ひし乎。是れ我が能く記憶する所、又後年觀察せし所なり。我は後年教育を受けしときの如く、長者が學問の正しき順序に循ひて、我に言語を供給するに由つて、言ふことを學びしに非ず。吾が神の我に賦與せし理會の方便に由りて、我自ら之を學べり。即ち我呼號、喚叫、其他一

切の喧嘈、態度を爲して、吾が感情を示し、吾が慾望を獲んと努力すれども、吾が意味の此等の記號を以て表はすを得ざるを見て、吾が傍なる人人の物品を呼ぶ名目を、吾が記憶の手に握り發しぬ。彼等が先づ言語を發し、次て手を伸べて或る物體に觸るに當り、我は注視して心に悟りぬ、彼等が物品を指示さんと欲するときに口より發する其音響が、即ち是れ彼等が其の物に附與せし名目なりと。

此の如きが彼等の企圖なることは、彼等の運動、即ち愛憎、用捨の意思を發表する所の目視、擧動、音響を以て互に語る所の、人間普通の原始の言語よりして明かなりとす。是に於て我は漸々文句に屬られし言語の貯蓄を儲け、之を反覆するに由りて、此等の言語が何物の記號なる乎を一々感知するに至り、吾が口を之が發表に慣すに及んで、我は竟に言語を操るの能力を得たり。是に於て我は吾が周圍の人々と此の意思の記號を交換し、內、猶ほ父母の權威、長者の監督に依賴せる間に、外、人間交

際の大海に泛み出でたり。

第九章

童年の學業の厭惡、遊戯の好愛、鞭笞の恐怖。

嗚呼神吾が神よ、當時我如何なる禍難を受け、如何なる欺騙を受けたりし乎。蓋は我、童兒の全き義務として、此の世界に於て成功し、人間の榮光と、虚僞なる富厚とに事ふる所の文藝に於て名譽を起すやう、警告しくるゝ人々に聽從すべく、專ら敎へられたればなり。當時我は書を學ぶ爲に學校に遣られたり。噫我其の何の用たるを知らざりしかども、若之を怠るときは鞭たれたりき。是れ古來の習慣なりき。吾人に先ち此の生活を活きたる輩、此の荆棘ある道を啓き、吾人をして其の上を履み行かしむるなり。アダムの子孫の爲に、苦勞と苦痛の加へられしこと、斯の如く甚だしきなり。

然るに我は偶爾に祈ると云ふ人に遭ひ、此等の人よりして吾人は爾の偉大者なること、爾は見るを得ざれども能く吾人に聽き、又能く吾人を援けたまふと云ふことを感ずるに至れり。(是れ小兒も亦均しく感ずるを得る所なり)。是に於て我は小兒の時にすらも、吾が救助、吾が隱家なる爾に祈るべく發め、爾に呼はんと吾が靭き舌の條を斷ちて爾に祈れり。——我小兒たりしかども如何に痛切に祈りたる乎——、我が學校にて鞭たれざらんとを。爾我に聽かざりき。然れど神之を無益としたまはざりき。然れども我が爲に唯善事あれかしとのみ望める所の吾が長者、乃至吾が父母すらも、吾が爲に最も痛く慘ましき禍なる打撲の傷痕を笑ひ視たりき。嗚呼主よ然までに心の高き人、然までに爾に傾向して、崇高なる奉事に心を委ねる人在り乎、——斯の如き人嘗てこれ在りや、蓋は感覺の缺乏すら人に勇氣を與ふべければなり、——即

ち偏に爾に固着して、人皆震慄して身を悚め、唯苟免を是れ祈るところの刑具、鈎、乃至滿足なる拷問道具を蔑視し、己の子の小學敎師より課せられたる痛楚を吾人の父母が笑ふ如く、殘酷なる逼害者を笑ひ視るまで、然までに剛毅なる人在る乎。吾人は必之を恐れて此等の刑具を遁がれんと熱心に祈るべきなり。而も尙且吾人に期待されたるよりも書くこと少く、讀むこと少く、考ふること少なき時には罪せられたり。嗚呼神よ我は記臆力に又才能に何等欠乏を感ずる無かりき、――爾之を其の年齡に比して豐に我に賜はりぬ。――然れども我は遊戯を好愛したり、而も我は之が爲に、必ずや昔同樣爲したりし人々に由りて罰せられたり。然れども長者の痴事は職務と呼ばれ、小兒の職務は大人の爲に罰せらる。而も何等小兒若くは大人を憫み、若くは兩者を併せて憫む者なかりき。小兒が球を弄ぶに當り、其の知識の上達に害あるが故に鞭たるべしと云ふことを、理性ある人能く正當と考ふべき乎。何となれば此の知識なる物は此の小兒が之を以て後年一倍下等なる遊戯を弄ぶべき道具に非ずして何ぞや。且夫我と我を笞つ敎師との間に果して何等の差別あり乎。蓋は若彼或る術學的鬪爭に於て其同僚の爲に敗られんには、其の慚憤と嫉妬の爲に錯亂すること、吾が投球の遊技に於て、對手に負けたる時よりも猶甚しければなり。

第十章

彼遊戯と觀玩（みせもの）の好愛の爲に、勉學より誘はる。

我は尙更に罪を犯せり。嗚呼主たる吾が神よ爾は萬物の創造者にして審判者、獨罪惡の審判者なり。吾が神よ我吾が父母、吾が敎師の命令を拒みたるが爲に我罪を犯せしなり。蓋は吾が保護者が惡き目的の爲に我に授けんと欲せし其の敎育を、我は善き目的に用ふるを得べか

りし故なり。然るに我が之に反對したるは熟考して善き方を擇びしに稗史小說を以て吾が耳を搔かんとする慾望ありき。是は愈搔けば愈痒きを覺えしむる物なりき。此の好奇心又吾が目にも躍り、長者の公觀と鬪技を觀望するに至れり。奇なる哉鬪技を示す所の長者輩が被せられたる尊敬が、殆んど一切の父母が其子の爲に渴望する所なるに、其の子若其の鬪技に誘はれて學問を廢すれば、父は其の子の打たるゝに委ぬとは。此の學問は其の子をして己の順番に當つて公觀を示すを得せしむる物に外ならざるに非ずや。嗚呼主よ、汝の慈悲此の事を照覽して、爾に喚ぶ者を救ひたまへ、又爾を喚ばざる者〔敎師先輩等〕をも救ひたまへ、是れ彼等の爾を喚ぶに至らん爲、而して爾の彼等を救ふに至らん爲なり。

第十一章

彼其の疾病に由りて沒式（バプテスマ）を受けんことを祈り、其母故意に之を延べたり。

吾人の主たる神よ、我猶一小兒たりしとき、既に吾人の傲慢の爲に謙りたまひし、爾の獨子の謙遜に由りて、吾人に約束したまひし永生の事を聞知したりき。我其の望を確に爾に置きし吾が母の胎內よりして、既に彼の十字架の記號を以て印せられ、彼の鹽を以て味つけられぬ。主よ爾は見そなはせり、我猶小兒なりし間、一旦不消化より萌（きざ）せる寒戰、吾が上に大熱を起し、殆ど死んとせるに當り、――嗚呼吾が神、爾此時既に吾が保護者にて在ましゝ故に見そなはせり、我吾が母を愛し、又吾人の母なる敎會を愛する一念に出でて、如何に熱心に爾の受膏者（キリスト）の沒式を受けんことを請願せし乎を。吾が肉の母、其の貞潔と其の忠信なる心

情と、吾が永劫の救拯の、萌芽(めざし)の爲め、然く辛勞したりし彼女戦慄に充たされ、我が入會式を受けて、罪の赦免を得べく、主耶蘇を口にて認はし、其の有力なる聖典に由りて洗はるべく、匆々支度しつゝありし際、我俄然として蘇生せりき。是に於て吾が洗滌は延べられたり、蓋は我猶活くべかりしかば、必ずや尙更に罪染に汚さるべきこと明かなりし故なり、即ち實に此の洗滌の後、罪業と罪の汚濁と一倍重大にして一倍危險なるべかりし故なり。

斯くて我は既に信者なりき。吾が母も亦然り全家皆然りき唯父然らざりしのみ。而も彼は母の愛の權能を妨げざりき。吾が信仰も最も弱しとは謂ふべからざりき、蓋は當時未だ信せざりし父もありし故なり。吾が母の堅く執りたる志望は、爾の吾父となりたまはんことなり。此事に就き彼女は爾の祐助を得て、其の夫を說き伏せたり、彼女は其夫より優りし人ながら、爾の明命に服せし故に、能く其夫に聽從したりき。

嗚呼吾が神、——我に訓へたまふこと聖旨に適はゞ、吾は喜んで之を知らんと欲す——、當時吾が沒式(バプテスマ)は何が故に延べられし乎。吾が頸の上の手綱、弛べられしは我が利益の爲なりし乎、若くは弛べられたるに非ざりしか、若非ざりしとせば、吾人は人の恒に「彼をして欲む所を行はしめよ、彼未だ沒められざればなり」と曰ふを聞く所以は抑も何ぞや。然れども小兒の健康懸念せらるゝ場合に、「彼をして再び傷かしめよ、彼未だ醫されざればなり」とは、吾人決して言ふことなし。我若速に醫されたりしならば、若我と吾が父母と、均しく吾が靈魂の健康の、其の賦與者たる爾の保護に由りて癒さるべく注意したらば善かりし者を、然り寔に善かりしなり。然れども吾が母は既に試誘の激浪、吾が童年の過ぐるや否や、必ず吾が上に逆卷き來るべきを前見しぬ。是故に母は此の激浪の上には、吾が內なる神の肖像(靈魂)を賭するより、寧我が型らるべかりし土塊(肉體)を賭するを擇みしなり。

第十二章

彼如何に惡動機より勉學に追ひ遣られし乎、尙且神は如何に之を善用に轉ぜし乎。

然れども猶吾が童年に於て(吾が父母は此の時代を未丁年の其よりも危險少しと思ひたり)、我は學問を好愛せず、之に追ひ遣らるゝを怨とせりき。尙且我は追ひ遣られぬ。而も是れ設し我之を好く爲ざりきとはいへ、吾が爲には好かりしなり。蓋は我壓制に非ざるよりは勉學に就くを欲せざりし故なり。蓋何人といへども、其の爲す所好きにせよ、其意志に反いて好く爲る者なし。且夫我を追ひ遣る人々も好く爲せるに非ざるなり。然れど神よ我は爾に由りて好く處置せられしなり。蓋は彼等は我を追ひ遣る所の學問に就き、何等他の効用あるを察せず、唯金を被せたる貧困と、恥づべき虛榮の飢渴とを滿足せんと欲するありしのみ。

然れども吾人の髮毛を總て數へたまふ爾は、我を駈りて學ばしめたる彼等の過失を吾が利益に轉け、我自身の過失、吾が學ぶことの嫌厭を、汝は吾が懲戒に轉けたまへり。蓋は然く少き小兒ながらも、然く大なる罪人なりし我は好く苦難に價したればなり。是故に我を惡く行ひし人々の手を籍りて、爾は我を好く行ひ、且我自らの罪に向ひて、爾正しく我に報ひぬ。蓋は爾不規律なる心は、即ち其自身の罰なりと命ぜし故なり。而して是れ正に爾なり。

第十三章

神は何の研究を最も愉快に感ぜし乎。

然れども我は今日に及んですら、何が故に希臘語を嫌ひたりしかを解

する能はず、是は吾が始めて學校に上りし時に學びし物なり。我は羅甸語を愛したり、――我が謂ふ所の羅甸語とは文學にして文典に非ざるなり。蓋は人の讀み、書き、數ふることを學ぶ所の羅典學校の初科は、希臘語と均しく始より終まで、我が退屈に感じ刑罰と考ふる所なりき。文學は何が故に之ある乎、是れ豈罪より又虛妄なる生活より來るに非ずして何ぞ耶。蓋は我は肉にして過去れば再び還らざる風なればなり(詩七八〇三九)。夫れ羅甸語の初科は我が讀まんと欲する書籍を讀み我が書かんと欲する所を書くを得る力を我に作くれば、文學よりも堅實なるが故に有益なるは固よりなりとす。後者に於て我は熱心にイーニャスの流轉を讀みつゝ、己の流轉を忘却し、失戀の爲に自殺したるヂドーの死の爲に泣ける間に、吾が生命なる爾より遙に遠く流轉し去りて、己自身の痛しき死をすら冷眼に看過したり。嗚呼己自身を憫むことを知らずしてイーニャスを愛したるが故に死にしデドーの爲の爲には千行の涙を注ぎて、神を愛せざる故に死すべき己自身の爲には一滴の涙をも有せぬ愚者ほど、世に憫むべき者あらん乎。

嗚呼神よ、吾が心の光よ、吾が靈魂の隱れたる麪、吾が心、思念を湛へたる吾が懷の大能の夫よ、我爾を愛せざりき。我爾を離れて奸婬の中に活きたり。人皆我を稱へて「善く爲たり」「善く爲たり」と曰へりき。蓋此の世と交際するは、爾に背いて奸婬するなり。「善く爲たり」「善く爲たり」と人は我が彼等の如くならざるを恥づるまでに呼べりき。我之が爲に一滴の涙なく、反つて劒を呑みて深淵に飛びこみたるデドーの爲には好く泣きたり。同時に我自ら爾を離れて爾の創造せる深淵に飛こみ、空く塵に歸らんとしたりき。若我此等の說話を讀むことを禁ぜらるれば我歎きぬ。是れ我をして眞に歎くことを知らしむる物(聖書)を讀む力無かりし故なり。此かる科目は單に讀むこと書くことよりも優りて高尙有益なる物と考へられたり、是は何たる狂妄ぞや。

然れど吾が神、今や爾の「眞理」をして高らかに吾が心の中に叫びて曰はしめよ、否、初科の敎育こそ倍善なりけれと。見よ我は讀むべき書くべき道よりも、寧イーニャスの流轉や、一切同樣の事實を忘却せんと欲す。實や小學校の扉の上に一張の幔懸れり、然も其の幔は虛僞の經帷子にして、奧義の被布に非ざるなり。彼等「敎師」をして復我に向つて叫ばしむる勿れ、我復彼等を恐れざるなり、同時に神よ我は爾に吾が靈魂の提願を告白し、快く吾が惡趣に對する宣告を受けん。是れ我が爾の善道を愛せんが爲なり。又文法の賣買者「敎師」をして我に向つて叫ばしむる勿れ。若我彼等に向ひ、詩人(一)がイーニャスがカルゼージより來りしと曰ふに當つて、彼事實を語れり乎と問はゞ、無學者は知らずと答へ、學者も知らずと答へんのみ。

然れども若我イーニャスの名を綴るの方を問はん乎、大凡綴方を學びたる者は、人が文字の使用法を規定したる其の習慣に遵ひて、正當に答

ふるを得ん。而して又若讀み、書く技術と、詩的戲作と孰か最も忘るゝに難き乎と問はゞ、苟も全く心を喪ふに非ざるよりは、誰か人の當に爲すべき答を知らざる者あらん乎。然らば則ち我は小兒として有用なる技術の代りに、此等無用なる者を擇み、否、寧一を愛して他を憎みし時に當つて罪を犯せり。「一に一足す二」「二に二足す四」我は之を退屈なる遊戲と思ひき。然れども彼の武器を操つる人物を孕みたりし木馬、トロイ城の火焰、クルーサの幽靈――此等の物は、我を奚はす空しき快樂に外ならざりき。

(一)譯者註、羅馬の詩人ヴージル、彼イーニャスと題する史詩を著はし、トロイの脫將イーニャスが、先づカルゼージに遁れ、女王ヂドーの愛する所となり、後又彼女を棄てゝ羅馬に航し、羅馬の都城を創立すと云ふ、架空の事蹟を詠ぜり。

第十四章

彼何が故に希臘語を嫌ひし乎。

我何が故に希臘文學を嫌ひし乎、是は實に此の如き唱歌に充たされたるに非ず乎。蓋はホーマーも亦其の巧なる手を以て、是等の稗史を編めりしを。且彼の空言ほど壯快なる物世に在る無し。然も是は小兒たる我に不快なりき。若し同一方法即ち言はゞ纏頭を以て之を學ばしめらるゝに於ては、ヴージルも希臘の兒童には亦然らんのみと我は思ふ。外國語に達するの纏頭は希臘の神話を苦味に變せしめたり。蓋は我は其の言の一をだに知れる物無く、而も威嚇と刑罰とに駈られて之を學ぶなりき。之に反して我幼冲なりしとき、未だ一羅甸語を知らざる時ありけれど、然れども我は愛撫、快笑、欣喜の間に乳母、朋友遊戯敵より、恐怖なく苦痛なく、唯注意するに由りて學ひき。

我言ふ、吾が心其の意味を悟らんとするに熟せし故に、我を強ふる刑罪の恐怖なくして羅甸語を學びたりと。然り、然れども我熟語の若干の貯蓄を積むに至りしまでは、之を爲す能はざりき。是は教師よりにても、談者よりにてもあらず、我は寧彼等の耳に逐一吾が思想を發表せんと苦心したる者なり。然らば則ち好奇心の自由は、恐怖の刺激よりも夐に勝れる國語の教師たること明かなり。然れども恐懼は爾の法律に乘じて好奇心の空幻を制限す。嗚呼神よ小學教師の朴より初まりて、殉教者に於ける火の試錬を以て終るところの爾の法律、吾が盃に完き苦味を雜ふる力あるところの爾の法律は、能く吾人を誘ひて汝を離れしむるところの危險なる快樂より我を爾に呼び返す。

第十五章

神の愛を祈る。

嗚呼主吾が請願を聽きたまへ、爾の叱咤の下に吾が靈魂を衰へしめたまふ勿れ。我をして爾の親愛を稱ふるに阻せしめたまふ勿れ。此の親愛に由りて、爾嘗て我を吾が一切の惡趣より救ひ出したまひしに非ず乎。願くは爾吾がために其の嘗て追ひ求めし一切の誘惑に優りて甘樂ならんことを。是れ吾が全力を以て爾を愛し、吾が全心を以て爾の手を握らん爲なり。然らば我終まで一切の誘惑より免るゝを得ん。嗚呼主、吾が王、吾が神よ、見よ我吾が小兒として學びし所の有用なる事物を擧げて爾の用に捧げん。吾が說話術、若くは書くこと讀むこと、乃至數ふること此等有益の事物を學ぶに當りて、爾は我を訓錬しつゝあり き。而して彼の空言に於ける吾が快樂の罪は、爾既に之を赦したま

へり。蓋は此等無益の事物の中に、有用なる多數の言語を我學びたればなり。是等の言語は無用ならざる事件に當つて、有功に適用せらるべき道具にして、又小兒の爲め步くべき平路なり。

第十六章

彼小兒を敎ふる方法を非難す。

然は然りながら、禍なる哉汝習慣風俗の流潮や、誰か能く爾を禦がん汝何日まで乾されず在る哉。汝何日までイブの子孫を己が巨大、兇猛なる海洋の中に卷き去るや。此の海洋は彼の方舟に泛びたる人々すら、殆と安全に濟ること能はざる所に非ずや。我は汝の書籍の中にチョプが雷神兼行姪者なることを讀みしに非ず乎。然れど彼如何にして兩者を兼ぬるを得し乎。此等の雜話は唯假作の雷鳴が眞の行姪者を

助け、之を宥すことも有るべきを語りしに過ぎず。吾が長袖の教授輩の孰か、己と等しく塵より成る人の言を忍んで聽んとする者ぞ。彼等は齊く叫ぶべし、曰く、「此等は凡て戯作なり、ホーマーは神を人の如く作れり。寧人を神の如く作らま欲しかりし」と。然れども實を云へば、此等の戯作は上に謂へる如き物なるが故に、放蕩漢に神性を歸する物なり。是れ放蕩か復た放蕩と稱られざらんが爲淫蕩兒が人間の最劣等者に非ず、天上の諸神と競ふべく見えんが爲なり。

尚且汝地獄の流潮よ、人の子どもは汝の中に投こまれ、此等の科業を學ぶために高價なる謝金を納む。此の如き教訓が公然と、堪能の學者に其の受くべき謝金以上の給料を約せる法律の面前に、市場に於て施さるゝは、一大不祥事に非ずして何ぞ耶。汝、汝の巖石に當つて陽言して曰く、「我言辭を敎ふ、能辯否説伏的辯説を授く」と。然し是れ果して然る乎。テレンス(一)がジョブの模範に由つて、己の淫行を是認する所の青

年放蕩兒を劇場に上するに非ざれば、吾人は「金雨」「前垂」「翻弄」「天堂」等の言辭を解すべからずとするか。看よ彼青年が壁の面に描かれたる畫象、「ジョブ如何に金雨となりて、ダナエー女(二)の前垂に降かゝり、而て其の少女が如何に翻弄されし乎」と云ふ怪談を解説せる畫象、を諦視せるを。見よ彼如何に他の神樣を籍り來りて其の獸慾を鼓舞せるか。

(一)譯者註、紀元前第二世の羅馬の喜劇戯作者。

(二)同、希臘神話中の女性、アルゴス王アゲリシアスの女なり。アゲリシアス王、神託に由りて其女ダナエーの所生の子、己を殺すべしと聞き、其女を銅の塔に幽し置けり。然るにジョブ金雨に化して彼女を訪ひ、彼女孕んで一子ペルシュースを生めり。彼後アルゴスに歸り、偶然玩具の投環を投じ祖父に中てゝ之を殺せり。

彼青年放蕩兒は曰く、「然り、然らば神とは何ぞ耶。轟然たる雷鳴を以て天堂を震はす所の彼は何ぞ耶。唯人なる所の我は同し順序を追ふべからず乎、我は愉快に之を追へり」と。卿等讀者が此等の言辭を一倍容易に學ばん爲に、必ずしも之と同一なる方法を以て罪を犯すべからざ

るは明かなり。然れども卿等が學ぶ此等の言辭に由りて、一倍勇敢に罪を犯すや亦明かなり。我は思想の器として擇ばれたる貴重なる此の言語を咎めず、唯沉溺せる教師輩が之を盛つて吾人の唇に含ましむる其の罪惡の美酒(言語を屬り成せる空言)を罪す。吾人若飲まざれば朴たれぬ。將た一人の醒めたる裁判官に控訴するを得ざりしなり。尙且神よ今こそ爾の前に吾が一切の回顧が恐懼を除きたりとはいへ、我は好んで此等の戲作を樂しんで學び、而も之が爲に多望の生徒と稱揚られしなり、嗟呼。

第十七章

彼一倍沉痛に小兒に文學を教ふる惡法を攻む。

嗚呼吾が神、我をして更に我が如何なる痴事に爾の恩賜なりける吾が才能を破碎せしかを語らしめよ。一個の課業更に我に課せられたり。是れ痛く吾が心を惱ましたり。是は褒賞、譴責、乃至鞭笞の約束の下に、女神ジュノーが其の伊太利よりチュークリヤ王を驅除する能はざりしより起る震怒と悲哀の演說を、我が演ずべしと云ふに在りき、我聞くジュノーは嘗て此の如き言語を發ちたることなしと。然も吾人一同は詩人の、空想の漂ふ足跡を尋ねて、詩人が韻文を以て歌ふ所を、露骨の散文を以て演ずべく命せられたり。蓋己の部分を演べて最大の喝采を得ん者は誰か、其の性格の威嚴に對して匹當の尊敬を表し、最も巧妙に其の激怒と悲哀を活現し、最も切實なる言語を以て其の感情を裝ふ

者に非ずや。

嗚呼吾が神、吾が眞の生命よ、今吾が暗誦にして吾が對手又同級生の其以上に喝采を受くるに至りしは何が故乎。此の如き勝利は唯空にして風なるに非ず耶。他に吾が才能と、吾が口舌を運用すべき領地を發見するを得ざりし乎。爾の讃美、然り主よ、聖書に見れたる爾の讃美は、天に朝し升る吾が心の蔓を拄ふべかりしに非ずや。是は無益の瑣事の間に吹き搖かされて、空の鳥の翻弄に任すべき物に非ざりき。蓋は墮落天使に奉事するの途甚だ多かるが故なり。

第十八章

人能く文典の法則を守る、神の法則は之を破る。

神よ然りといへども、若我世人と競ふべく教育せられたるに當りて、空言に沈んで爾の家を遺てたりとせば、何の怪しき事かあらん。彼等世人は或る無害の事實を發揮するに、破格若くは杜撰を耻ぢ、偏に其の辯說の簡淨と、鋭利、流暢と華麗とを誇り、之を以て己の不德を發表せるなり。嗚呼神よ、恩寵と眞實の豐富なるに由りて容忍したまふ所の爾、此等の事を見そなはして默したまへり。爾は永久默したまはん耶。今も爾は此の底なき坑よりして、爾を求め爾の喜に入らんとして餓え渴き、爾に向ひて「主よ我爾の聖顏を尋ねたり、猶も爾の聖顏を尋ねん」(詩二七〇八)と謂ふ靈魂を取り出したまふ。蓋は我一たび杳に聖顏を遠かり、吾が心底の闇黑に沈みたりし故なり。

我が爾を離れ去り、又爾に返し來るも、吾が兩足の運動に由り、測量し得る空間に由りてするにあらず。爾の末子は雇へる馬、又車又船を以てせし乎(一)、其の家を出づる際爾が與へたまひし凡の貨財を放蕩生活に費し、所の遠國に出で發ちしは(二)、眞の翼にて飛び至りし乎、將た眞の

脚にて歩み往きし乎(二)、嗚呼父よ爾は愛を以て放蕩息子に資產を與へ、更に大なる愛を以て、其の返り來りしを免したまへり。其の遠國、闇黑の國、聖顏より遙かなる地は、肉慾是なり。嗚呼主よ爾の恒にしたまふ如く忍耐を以て之を見たまへ。彼等世人が古の辯說者より受けたる文字、經字の約束を如何に謹愼に守れる乎。之に反して爾より授けられたる永生に關する永劫の約束を、如何に疎忽に破れる乎を。發音の一時的名譽の法則を信じ、且之を敎ふる人、若文法の規則に叛きて「じんるゐ」(人類)と曰ふ爲に「じんるい」と曰はん乎。其の同胞骨肉に對して凌辱を加へたること、爾の法則を破りて、己が屬する人類に害を加へたるよりも甚だしとす。恰も己を敵(人類の)と思料せる敵愾よりも勝りて危險なる敵ありしかの如く、又恰も己の惡意が、己の靈魂を亡ぼすにも勝りて他を亡し得るもの有るかの如く思惟したりき。

(一)(原註)、プロチナス(紀元三世紀、新プラトニズムの主唱者、羅馬の哲學者)の「エンニイド」

(二)譯者註、新約聖書路加傳第十五章十一節以下放蕩息子の喩

言語の法則は良心の法則の如く深く吾人の心に銘されたるに非ざるや審かなり。「人汝に施すことを欲せざる所、汝亦人に施すこと勿れ」と云ふ、是れ即ち良心の法則なり。嗚呼神爾唯獨り靜に聖所に住み、其の無謬の規則を以て、不法の情慾に刑罰的失明を送りたまふ偉大者、何ぞ爾己を隱したまふ乎。人なる裁判官の前に、人なる傍聽者の環視の中に、能辯の光榮を求むる輩は、其の敵を罵るに最も苦味なる憤慨を以てする間に、最も縝密に己を護り、萬一其舌自ら滑りて「人ぞありけれ」と云ふが如き無からんことを虞る。然も己の狂暴の爲に、人が人の中より滅ぶが如きこと無きやう何等の注意を施す者無し。

第十九章

少年時代の不德、如何に後年に遂り來りたる乎。

此の如き、是れ吾が德義生活の玄關にして、此の如き、是れ生活の戰場に對する吾が訓錬なりき。我が破格〔文法上の〕を洩すことを恐るゝの甚だしき、之を恐れざる者を羨むの遑なかりき。嗚呼吾が神我は此等一切の罪過を爾に告白す、然も彼等、此等の罪過を功績と思ひ、我は其人々の賞讃を以て吾が優等の標準と爲しき。蓋は爾の前より投入せられし吾が罪惡の深淵を自ら見ること能はざりし故なり。爾の眼の中に我より惡しき者あり乎。否、罪惡すらも我に有罪を宣告せり。蓋は我遊戲の好愛、無益なる道樂の嗜好、乃至舞臺の痴戲を模擬せんと欲する不斷の慾望に由りて、吾が敎師、先生、父母に對し、無數の詐欺を行ひし故なり。我父の土藏、几案より盜み出すこと一回以上に及べりき。是は

己が貪婪の命令に出て、又他の小兒等に何物をか與ふることを得んが爲なりき。蓋は彼等も其の遊技の勝負を愛むは、我に異らざりしかど、も、之を我に賣り與へし故なり。我亦遊技に臨んで、己勝たんの空しき慾望に勝たれしとき、我は屢瞞着手段を以て勝を得んと求めたりき。然れども此等我が他に向ひて弄びし手段ほど吾が疾み視しもの有りし乎。我が他の此等を發見せし時ほど、怒つて斥けし者有りし乎。然るに若し我自ら發見されたる時は、我之を棄つるよりは反りて怒れり。是は此れ小兒の無罪なり乎。然らず。主よ是れ決して然らざるなり。嗚呼吾が神我此の罪の赦されん爲爾に呼號す。童年に於て、栗の爲、球の爲、雀の爲に、敎師、先生に叛きし如く、吾人は亦成年に於て黃金の爲、邸宅の爲、奴隸の爲に、知事、帝王に叛かざらん乎。是故に一倍重大なる刑罰來つて敎師の鞭笞に代るなり。然らば則ち是れ果して小兒の小弱の上に表彰せられし謙遜なり乎。爾は彼を薦めて曰く、「天國に在る者

は此の如き者なり」(太十九〇十四)と。噫。

第二十章

彼小兒の祝福の爲に感謝を捧ぐ。

嗚呼主吾が神、尙且爾は至善、至上の創造者、世界の主宰者にて在します。爾我が小兒より長ずるを欲せざりしに管らず、我爾に感謝を負荷す。蓋は我斯く在り、生きて在り、感ずるを得、吾が人格即ち吾が存在の根す所の幽玄なる一致の印象を獲るを得たればなり。即ち我は吾が內面の感覺に由りて外面感覺の精確を證し得たりし故なり。我は眞理に快樂を發見し、小事に於てすら、又小事の反省に於てすら然せりき、我は過失を爲すを忍ぶ能はざりき。吾が記臆は把拄的に、吾が言語には文彩ありき。友誼を以て自ら慰め、苦痛、醜辱、無識は我之を避くるを能くしき。斯の如き所造物の一全體が、驚異と讃美とを要求するは宜ならずや。

然れども是は皆神の恩惠にして、我が私すべき物一有るなし。是等の機能は總て善なり。而して我は此等の全體なり。然らば我を造りし彼は眞に善なり。極て善なり。我彼に向ひて我に屬ける一切善の爲に、小兒としてだも高聲に感謝せん。吾が罪は快樂、偉大眞實を求むるに彼の中に於てせず、反りて其の所造物即ち我と他人の中に於てしたるに在りき。而て我逆に悲哀と混惑と過失の中に陷りぬ。嗚呼吾が神、吾が歡喜、吾が光榮、又吾が倚賴なる爾に感謝す。願くは爾の一切の賜物の爲に、感謝爾に歸せんことを。然れど願くは爾此等の賜物を吾が爲に安然に守らんことを。蓋は若然せば爾我を安然に守るべく、而して爾の賜物愈加り、竟に完全に達るべき故なり。而て我は爾と共に在るべし、蓋は吾が存在は固より爾の賜物なればなり。

アウガスチン懺悔錄

第二篇

彼次期の生活に進入して家庭に於ける壓制的痴戯、肉慾、娯樂の爲に費したる其の青春の初年を衷心より告白し、其の伴侶と與に行ひし竊盜に對して、嚴酷なる宣告を下せり。

第一章

彼青春の齡と其の諸の不德を回顧す。

我吾が過去一切の罪惡と吾が靈魂の肉慾的腐敗を記錄せんと欲す。嗚呼吾が神、是れ我が回顧を愛する爲にあらず、唯我が爾を愛せんが爲なり。爾を愛する愛の爲に、我再び自個撿閲の苦痛の間に、吾が最も險難なる道程に旅立ちす、是れ爾が、吾が歡喜、吾が永久不變の歡喜となり、吾が幸福なる、無所畏の歡喜とならせたまはん爲なり。是れ爾我が支離に裂かれし斷片より再び我を聚成したまはん爲なり。蓋は我全一

アウガスチン懺悔錄

者より轉きしや否や、許多に分散したればなり。

青春の時に於て我切に野獸の狩獵に吾が滿足を取り、敢然森林を徘徊し、陰影の下に吾が放浪の愛を追求めぬ。吾が美は消散し、爾の眼に醜化せり。己を悅ばし人の眼を悅ばせんと務めし故なり。

第二章

彼青春の猛烈なる淫慾を責む。

當時我に愉快を與へしは、愛する事と、愛さるゝ事とに非ずして何なりしや。然れども我靈魂と靈魂とを結合する所の光の國に己を持することを能はざりき。淫慾の濕地より、成年の井泉より、蒸發せらるゝ物は他なし、吾が心を曇まし、欺くところの妖霧なりき。是故に我は愛情の晴天と淫慾の曇天とを辨ずるを得ざりき。兩者雜然として我が內より

襲ひ至り、吾が無分別の青春を肉慾の懸蛭の上に卷き揚げ、之を渦く破廉恥の池に投下して溺れしめぬ。爾の赫怒重く吾が上に橫はれり、而も我之を知らざりしなり。我吾が銕鎖の響に盤して何等聞くところ無かりき。是れ吾が靈魂の慢心の罰なりき。而て我は爾の前より遠く遥かに漂流し離りぬ。爾我を己が嗜慾に委ねたまへり。吾が色慾の暴潮は漲り溢れ、沸き出て駛れり。嗚呼吾が晩く發見したる光よ、爾は宣ふ所なかりき。爾宣ふ所なかりしかば、我愈益漂蕩し去りて、高慢なる絕望と不斷の不安とに充ちたる荒凉なる悲哀の曠野にさすらひ至りぬ。

何人も、能く吾が不幸を減じ、人世の美の無常の魔力〔愛情〕を善趣に轉じて、其の魔力に制限を加へ、吾が青春の狂瀾を遏めて能く結婚の彼岸に若せしむる者なかりき。若其の怒濤全く鎭することを得ずんば神よ、我は爾の法律に率ひ小兒を儲けたりし時に滿足するを得たりしなら

ん。爾は吾人必滅者に與ふるに子孫を以てし、又其の爾の樂園より絶たれて、如何に軟かなる觸歩を以て其の荊棘を履む乎を知りたまふ。蓋は爾の全能は吾人が如何に爾より離るゝに當りても、吾人を離るゝ無ければなり。然らずんば我毫くとも雲より響く爾の聲に吾が耳を傾くべかりき、曰く、「然ど此の如き者は身に煩累あらん、我汝等を煩はしむるに忍びず」と、又曰く男は女に觸ざるを善とす」と、又曰く、「婚姻せざる者は如何に主を悅ばせんと主の事を思ひ煩ひ、婚姻せし者は如何に妻を悅ばせんと世の事を思ひ煩ふ」と（哥前七〇一、二八、三二）。

我は謹で此等の聲に聽くべかりき。即ち我は天國の爲に己を寺人と爲し、幸にして爾の抱懷を待つべかりき。嗚呼悲い哉我は沸き立つ放縱の熱血に爾の手より奪ひ取られぬ。我は爾の律法の墻壁を鑽りぬ、尙且爾の救を遁るゝを得ざりき、蓋は誰も遁るゝを得ざればなり。爾恒に吾が傍に在り、其の慈悲の赫怒を以て吾が有らゆる不義の快樂を傷なふに、苦き煩悶を以てしたまへり。是れ我が煩悶なき快樂を求むるを習はん爲、又爾を舍てゝ――其の教訓を以て我が內に煩悶を起し、癒さんが爲に我を鞭ち、爾を離れて死なざるやう我を殺す所の爾を舍てゝ、爾の如き他の何等の者をも我が發見する無からん爲なり。當時我は安に在りし乎、吾が肉の齡の第十六歲の時、爾の家の快樂から如何に遁けく放逐されし乎。此時に於て人間の破廉恥心は之を許容し、爾の法律は之を罪する所の淫慾の狂熱は、如何に我を放蕩てふ暴君の權威の下に投與したりし乎。尙且吾が親戚は我を顧みて、結婚を以て我を墮落より救ふことを嘗てせざりき。彼等の惟一の注意は、我をして演說を爲すことを習はしむる唯其の一事に在りき。

第三章

彼を大學に遣らんとする其の父母の決心に就て。

此の一年の間吾が勉學は中止せられぬ。我は文學と修辭學との教課を受くべく寄寓したりし、隣市マドウラより喚還へされたり。而も唯一貧士なりしかども、其の財布以上の精神を有ちし吾が父は、我を更に遠きカルゼーシに送らん爲に財産を儉約しつゝありしなり。嗚呼神よ、我は此の一切を爾に語らず、寧爾の面前にて吾が同類即ち此の書に眼を點ずるほどの人類の一少部分に語る。何が故か、他なし我は讀者と與に、吾人は如何なる深淵よりして爾に叫ばざるべからざるかを考慮する所あらんが爲なり。而も比較的に爾の耳に近き者は悔改めし心と忠信なる生活に如くは莫し。然らば則ち誰か吾が父の讃美を歌はざる者あらん乎。蓋は彼其の疲せたる財布から、其子を遠方の大學

に送らんと、其の滯在に必要なる一切を供へし故なり。彼より夐に富有なりし市民といへども、其の兒女の進達の爲に、此の如き苦慮を取る者は罕なり。此の忠信なる父にして、尙且自ら何等介意する所なかりし一事は是なり、嗚呼爾の葡萄園なる吾が心の、眞の主にて在します神、縱令我爾の修養を受くるを缺くとも、第修養の人たりせば、爾に方向して如何に進歩したりし乎、又我如何に貞潔に身を持ちし乎〔父已に妻を與へざりしを慨く〕。

然れど吾が十六歳の一年間、我此の儉約手段に束縛せられて空しく完き安息を守り、父母の家庭に、生活せしが、淫慾の刺吾が頭よりも高く伸び、之を拔き取らん爲に何人の手を假す者無かりき。否父一たび吾が浴室に在るを見て、當時既に壯漢たるべき吾が體格の徵候を認めて、往て吾が母に語り、其の壯健なる孫兒を得べき望あるを慶祝しぬ。大凡此の世の習の如く、彼は陋劣なる願望に惑溺して、所造物を之が創造者

に優りて愛したればなり。當時爾は既に吾が母の心の中に爾の殿を建つるに着手し、其の聖所の礎を置へたまひしかど、吾が父は猶ほ求道者にして、其さへ輓近の事なりき。是故に母は神を畏れて惶さ、我が未だ信者の一に非ざりしがとも、邪徑、即ち神に其の面を向けずして、其の脊を向くる輩の踐み入る邪徑に墮ちんことを恐れしなり。

噫我が爾の許より遠く吟ひ去りし間、爾我を默して視たまひたりと、我敢て言ふべき乎。爾が默せしは眞なり。然らば吾が母なる爾の忠婢の口を籍りて、反覆吾が耳を撲ちし此等の言語は、誰が言語なり乎。其の一言も吾が心に達せず、又吾が思考を震盪せざりき。我は記憶す、密話の際、母は最も切なる願求に出で、吾が奸通を避くべきこと、中に就て他の妻を汚すことを斷じて爲すべからずと戒めたり。我謂へらく、是唯小心なるのみ、男子の介意するを恥づべき物なりと。然も是は爾の聲なりき、唯我之を知らざりしのみ。我謂らく爾は默せり、唯吾が母獨

語れるなりと。然るに是爾の彼女に託りて語る所、而して爾の彼女に由りて蔑視されたまへるなりき。之を蔑視する者は即ち爾の僕即ち爾の婢の子、彼女の子、なる我なりしなり。然れども我之を知らずして、旨然其中に沉溺し、吾が同人が其の敗行を誇るを聞き、最も奸惡なる者が最も高聲に傲るを聞き、我亦彼等の破廉恥に及ばざるを恥ぢ、唯快樂の爲のみならず、又名譽の爲に、競ふて之を行ふに至れり。

咎むべきは罪惡に非ず耶、尙且我は咎を免かれんが爲に、更に重大なる罪惡を行ひ、而て吾が奸惡者の功業に匹敵し能はざるに當つて、我は己の爲に小說を揑造せり。是れ比較的無罪に、比較的貞潔なるが爲に、卑劣漢と呼ばれ不人望と稱はれざらん爲なりき。見よ我如何なる伴侶とバビロンの市街(淫靡街の代名詞)を徘徊し、汚水の中に轉ぶこと、香料若くは寶油の中に於てせる如くなりし乎。其の罪惡市の中心に於て、幽靈然たる吾が敵我を踏み碎き、極めて固く我を拉へたり、――我が容

易に誘はるべかりしかば、容易に我を誘ひたるなり。蓋は吾が肉の母すら――此のバビロンの中心より遁れながら、尙且其の境界線に跋行しつつありし彼女すら、――我を戒むるに不貞の罪を以しながら、我に就て其の夫に聞きし所に隨ひて何等爲す所無かりしなり。危險既に絶頂に達し、我を威嚇するに未來の破滅を以てせるにも管らず、吾が母は合法的結婚の樊籠の中に、吾が情慾を制限せざりき。是れ若し吾が情慾の直に克伐さるゝを得ざるに當つては、須らく行はるべき所なりき。然も其の行はざりし理由は、妻子の牽引の爲吾が前途の希望の妨げられんことを、彼女が懼れたりと曰ふに在りき。然も吾が希望とは母が爾に由りて懷ける永生の希望に非ず、文藝を以て名を顯さんの希望なりき。是吾が父母の我が爲に等く渴望せし所なり、蓋は吾が父は、我に就て考ふる所甚だ愚にして、爾に就ては考ふること殆ど之無く、吾が母は世俗の敎育は、爾を發見するに妨げ無きのみならず、反りて積極

積極的幇助たるべしと思ひし故なり。是の如き是れ吾が父母の性情を、及ぶ限り憶ひ起すとき、我が洞察し得る所なり。且夫馬勒は弛められしまゝ、緊縮すべき考慮ある無し。我は吾が放縱なる空想に任かせて己を娛ますべく容されてき。是故に吾が周圍渾べて是れ暗黑にして爾の眞理の和光を蔽ひ、吾が不義のみ獨り「肥滿りて其眼飛び出づる」(詩七三〇三)までに及べり。

第四章

彼其の伴侶と與に行ひし竊盜の事實を告白す。

嗚呼主よ竊盜は爾の法律の正に罰する所、罪念をすら塗り消す能はざる所の良心に銘されし法律も亦然り、蓋は一の盜賊も他の盜賊を容る能はざる故なり、一は富み居り、他は貧に追はれて之を行ふにも拘らず。

我が盜むべく決せしや、我は盜めり。缺乏又は困窮の故に非らで、公義の蔑視、即ち生長せる罪惡の亡狀に出て盜めり。蓋は我豐かに持てる物、之より倍善なるを有てる物を盜みし故なり。我が娛樂を求めたる所は我が盜みし其物に非ず、唯竊盜罪の實行に在りき。茲に吾人の葡萄園の外に一本の梨樹の好く結實を垂るゝありき。然れども其の梨果の誘ふ所は目と口とに非ざりき。吾人は夜半に至るまで、其の亂暴なる習慣に從ひて、市の往來を喧噪し歩き、而て後無賴軍の一隊を成し、梨樹を目的に突進し、之を震ひ、之を掠めぬ。吾人は巨額の軍寶を運び行けり。己を饗す爲に非らで、豚に拋つ爲なりき、其の幾顆をか食へりとはいへども、吾人は徒惡行の快樂の爲に之を爲したり。

嗚呼吾が神吾が心を瞰下したまへ。爾が底なき淵に於て憐れみたまひし吾が此の心を瞰下したまへ。吾が此の心をして今爾に告白せしめよ。當時其の求むる物は何なりし乎。我如何に虛妄の爲に吾が靈

魂を賣りし乎を。吾が行ひし惡慝の爲、徒惡慝自身の外何等の原因あること無し。是は固より醜むべかりき、尙且我は之を愛しき。我は己の滅亡と己の犯罪とを愛したり。犯罪の目的に非ず、唯犯罪其事實を愛したり。我は星輝ける爾の天蓋の外なる暗黑に遁れて、恥辱の種子より、恥辱の結果の外には何等の利益をも求め得ざる滅亡の靈魂なりしのみ。

第五章

何人も故無く罪を犯すこと無し。

蓋し大凡美麗なる物、金、銀、珠玉、其他の物品には必ず快感を與ふる所以の物あり。吾人は觸覺に快なる者に觸れんことを好む、吾人の有らゆる感官に對して、外物にも亦之と相應する所の性質ありて、感官の滿足

の爲に役事す。世間的の威嚴、命令、權勢、皆各自に其の光榮を有す、其の光榮よりして復讐の情慾興る。而も吾人は此等情慾の目的の一個の爲にも、爾を舍て、又爾の命令を舍るを得ず。其の如く吾人の地上の生活といへども其の特異なる魔力を有す、蓋は此の生活も亦或る程度の威嚴を有し、最も賤しき美の形式と或る關係を有すればなり。友誼も亦甘樂なる紐なり、蓋は多數の心を一に結着すればなり。此の如き事物は渾べて是れ罪の機會たるなり。何となれば吾人は切に此等最も陋劣なる利益に傾向して、更に善美、高貴なる事物、即、吾が神なる爾自身、又其の眞理又其の法律を捉ふることを過つ故なり。此かる賤しき事物すら能く快樂を與ふ、然も是は萬物を造りたる爾の與ふるが如きに非ざるなり。蓋は義人は爾を樂み、心の眞なる者は爾を歡へばなり。是故に裁判官は犯罪の行はれたる所以を訊問するに當り、其の動機を、我が最も陋劣と呼ぶ所の此等の事物の一を得るの慾望、又之を

失ふの恐怖の中に發見するまでは、滿足するなし。蓋は此等は縱ひ一層高貴なる事物、即ち天の富有と較ぶれば、貧しく憫むべき物なりとはいへ、尙且美にして榮あればなり。

人あり殺人を行へり、何が故か、曰く其の殺されし者の妻と其の所有とを渴望したる故なり。曰く彼は生活の爲に奪へり。曰く彼は己が殺しゝ其人が己の所有を奪はんことを恐れたりき。曰く彼、我を賊へり、故に復讐に渴きしなりと(其の理由蓋此の如くならん)。然り、彼豈理由無くして、單だ血を流す滿足の爲に人を殺さん乎。此の如きは信ずべからざる事なり。勿論吾人は嘗て狂氣せる一野蠻人が、故なき兇暴と殘酷を、好んで爲せることを讀みぬ。然れども彼のカチリン(羅馬の有名なる殺人犯者)も猶與ふべき理由を有せり。曰く(吾が手吾が意志の實行を退避せざらん爲なり)(一)と。彼何を意味せるか、不斷犯罪の反覆に由りて羅馬を劫掠し、官職、權威、富有を奪はん爲なり。其の絕望的貪

困と、血に塗れたる良心に刺激せられて、何等の法律をも恐れず何等の危險をも避けざらん爲なり。

(一)紀元前一世紀に於ける羅馬の歴史家サルストの「カチリン」。

第六章

神は眞實にして完全なる善なり、故に誘惑も亦之と類似す。

噫吾が竊盗罪よ、吾が十六歳の時に行ひし半宵の犯罪よ。然らば則ち吾が汝を愛したるは、何等の理由ぞ耶。汝は即ち竊盗なり、如何んぞ美なることを得ん、否汝は我をして言説を費さしむるに足る事物に非ざるなり。吾が盗みし其の梨は目に觀るに美しかりき、蓋は是爾の造れる物なるが故なり。嗚呼爾一切中の至美なる者、一切を造りし神、至善の神、至上の神、吾が「眞善」よ、其梨は美しかりき。而も吾が墮き心を餓渴

せしめたるは之が爲に非らざりき。吾は之より優れる物の許多を有しき。我唯彼等を盗む爲に搔き聚めたり。蓋は我聚めたる後之を拋ち、我に一切の快樂を與へし所の惡事其物の外、何等の甘味をも嘗はざりき。蓋は若其の一顆を喰ひしとするも、其の香味は又此の罪より來るに外ならねばなり。

嗚呼吾が神よ、我今問ふ、吾を然く牽着けしは竊盗中の何物なりきやと、見よ其の中に何等の美をも有せざるなり。夫正義に美あり、智慧に美あり、理性に、記臆に、諸の感覺に皆美あり。人生の最も劣等なる行爲にすらも尙且美あり。彼の小珠の然く愛(めで)たく耀く星に美あり。山に、海に、生命の軍隊を助くる所の生々する衆群に美あり。然れども竊盗は何等其の一をも有せざるなり。否誘惑する罪惡の中に吾人が往々見る所の、其不具闇黑の美をだにも有せざるなり。蓋傲慢は高貴に似たり、然れど爾獨神に在まし、萬物の上に崇められたまふ。野心は名譽と

榮光とを慾求す、而も爾は萬物の上に榮められたまふ。永劫に榮められたまふ。殘酷なる權門は恐怖を起さしめんと慾す、然も惟一の神の外吾人は誰を懼れん乎。其の權威は腕力も智術も之を挫く能はず、時間も空間も、乃至人間も之を避くる能はず。放蕩的寵愛は愛を贏ち得んと欲す、然れども何等の寵愛か爾の慈惠より甘美なる者あらん乎。又何物か爾の最も美なる榮ある眞理ほど然く安全に、吾人の愛すべき物あらん乎。好奇心は智識の欲求を動かす、然も爾は完全に一切を知悉す。

無智又闇愚すらも質朴、又無罪の名稱の下に己を裝ふ。蓋は質朴なること爾の如く、無罪なること爾の如き者無ければなり。是れ爾の言語は惡人の爲に有害なるが故なり。怠慢は平和の爲に好ましく見ゆ、然れども主を外にして何等確然たる平和あらん乎。豪奢は己を圓滿又具足と呼ぶ、然れど爾は自ら萬物を以て充實し、不朽の快樂を生ずる無

盡の寶藏を以て充實す。放蕩は寛大を假裝す、然れど爾は一切善なる物を豐富に施與する神なり。貪慾は多物を懷けり、然れど汝は萬物を有てり。嫉妬は卓拔の爲に競爭す、然れど誰か卓拔爾の上に出る者ぞ耶。憤怒は復讐を求む、而も爾は義なる復讐者なり。恐懼は新奇、又意外の爲に驚き、其の愛する物を脅かさんとする危險に備ふ、然れど爾に在りては何等新奇なる物なく、何等意外なる物なく、爾の愛する物を爾より取り放ち得る者なし。爾に賴らずば何等堅固なる安全ある無し、憂鬱は其の愛溺したる者の喪亡の爲に歎く、是は爾に似たる所あり、然も爾よりは誰も奪ひ去るを得る者なし。

是故に若靈魂にして爾に背き、爾を外にして此等の歡樂を求むるに當りては、娼婦を弄ぶ者なり。此等の歡樂は唯爾に歸順して始めて其の清淨を顯し得る者なればなり。爾の許を飛び去る者は、唯拙く爾を摸擬して、爾に向つて其の角を昂ぐ、尙且己の拙き摸倣に由りて、爾の一切

萬物の創造主なること、是故に又爾の外に飛び去るの不可能なることを證す。然らば則ち吾が其の竊盜の中に、吾が愛し〻物は抑も何ぞ耶。腕力又は智術に由つて、法律を破りし事に、自由に牢獄に游ぶ事に、全能の影とも見ゆべき無罪を以て、能く罪惡を行ひ得る事を示す事に、此等の事に快樂ありし乎。見よ此の如きは其の主の面前を遁れて、其の背影を獲んと欲する惡僕なり。咄何たる腐敗、何たる恐しき生涯乎、何たる死の深淵なる乎。其の禁遏されたるが故に、正に其の禁遏されたる事物を愛すべしと考ふるとは抑も如何なる心ぞや。

第七章

彼其の罪の赦されし爲、又其の保護に依りて他の無數の罪より免れし爲に神に感謝す。

我主に如何なる報酬を捧ぐべき乎、蓋は吾が記臆が是の一切を憶ひ起すに當り、吾が靈魂は何等の恐怖をも感せざるが故なり〔既に罪を赦されたゝへん。蓋は爾既に我が負ふ所の一切、吾が罪惡、吾が犯罪の行爲を宥したまひし故なり。吾が罪の氷の如く融解したるは、唯爾の恩寵と爾の慈悲に歸すべし、而して吾が若干の罪惡を犯さずして止みしも、亦爾の恩寵に歸すべし、蓋は既に結果なき過失をすら嗜みし我、何事をか爲す能はざらん乎、是故に我は吾が一切の罪惡、即ち吾が同意よし犯し罪惡、爾の保護に由りて免れし罪惡を爾の前に告白す。

然らば人己の柔弱を熟思せる同時に、其の貞潔と無罪とを其の天性の力に歸せんとするは何ぞ耶、若然らば爾が悔改者の罪を赦したまふ其の慈悲の必要少きが故に、少く爾を愛すべき乎。若人爾に召され、其の召に隨ひ、而して吾が茲に記述し懺悔する所の此等の罪惡を免れたら

んに、其人吾を嘲笑ふ勿れ。蓋は其の嘗て病むことなく、又病んで我が甚きに至らざりしは、我を治したる其の醫者の仁慈に歸すべければなり。是故に彼をして我と等く、否寧我に益りて爾を愛せしめよ。蓋は此の沉痛なる疾患より我を救ひし其の手が、感染の接觸より彼を護りたるか故なり。

第八章

彼を竊盜の中に牽引したる物は何ぞ耶。

噫我昔、今日之を顧れば恥づる外なき此等の事物、特別に唯竊盜の爲に竊盜を行ひしときに果して何等の結果を得し乎。竊盜以外、其の中に何等愛すべき物無し。蓋は其の行爲自身既に虛妄なりし故なり、我は之が爲に彌憫むべき者なりき。尙且我は自ら之を爲すべからざりき。

是れ我が當時に於ける感情に就きて憶ひ興す所なり。然り我自ら之を爲すべきに非らざりしは審かなり。然らば則ち我又吾が伴侶の交際を愛せしなり。是故に我を牽引せしものは竊盜以外某の物ありし乎、否、何等之以外の物在ること無し。蓋は其の某の物すら何等の物にも非ざればなり。

吾が衷心を照し、其の暗處を貫く所の神に非らで、誰か能く我に敎へん乎、此の行爲、即ち我をして斯く批判し、議論し、考慮せしむる所の此の行爲の眞意義を誰か能く我に敎へん。蓋は若我吾が竊みし梨を欲したりせば、之を喰はんと欲したりせば、我唯單刀直入之を行ひて(人之を行ひ得るものとせば)吾が慾望を滿さんと求むべかりき。將又我自ら豕の如く、吾が伴侶を擽るに由りて、已の食慾の貪欲を益すの要なかりき。然れども梨には何等の愉快も無く、愉快は行爲自身に在りき。罪人の伴侶たるに在りき。

第九章

惡友の感化。

嗚呼是は何たる心の狀態ぞ耶、何人も之より醜惡なるを得ざらん、噫是吾が狀態なりき。是は抑も何等の罪ぞ耶、誰か其の何等の罪なりと定め得る乎。快笑吾人の心を擽りぬ、是れ人々の吾人が爲しゝ所を知らざる故なり。若彼等之を知らば震怒したらん。而して吾人は彼等を欺騙するに成効したらん。然らば我は何が故に此の行爲を喜びし乎。同伴と與に行ひし故乎。又是は人は獨笑ふこと罕なる故乎。是は罕には眞なり。然れども人は往々全く獨り居るとき、怪事の心眼に浮むに遭へば忽ち破笑す、然れど我は然らざりき、――我は審かに然らざりき、我若獨在りしならば。

嗚呼主見たまへ、我吾が內心の活ける記憶を爾の前に白狀す。唯我一

人にては決して此の竊盜、即ち竊みたる物を求めず、唯竊盜自身を求むる所の此の竊盜を行ふべからざりき。我自ら之を行はんには何等の愉快を看出さゝるは明かなりき。嗚呼不誼なる友愃なる哉、汝の誘惑如何に奇怪なるか。嬉戲、快笑より、禍害を與ふべき慾望來り、損害を加ふべき熱望來れり、――利獲の爲にも非ず、將た復讐の爲にも非ず、友人皆曰ふ、「來行るべし」と。而て吾人は寧己の無慚ならぬを慚ぢてき。

第十章

善なる者は凡神の中に在り。

誰か此の紛糾綢繆せる亂絲を解き得る乎。請ふ我をして之を思はざらしめよ、我をして之を見ざらしめよ、嗚呼「公平」よ、「無罪」よ、天の光を有てる美しく且愛すべき者よ、我爾を戀ひ慕ひ、而して恒に渴仰するを以て

滿足す。深き平和と動なき生命と爾に在り、爾に入り來る者は其の主の歡喜に入り來り、恐るゝことなく其の完全に由りて完全なるべし。

嗚呼吾が神よ、我吾が青春に於て爾を離れ、爾の永劫なる安息より迷ひ出て、我自ら荒れ乾きたる土と化してき。

第三篇

彼其の文學研究の爲、カルセージに在りし時過ぐせし其青春時代を語る。此の時期の間彼如何に不潔なる戀愛の圈套に係りしか、又マニ教の異端に墮せしかを告白す。彼は明瞭に此派の虛妄と其の誤謬を論ず。彼其の母の血涙と、神の彼女に爲したまひし約束、即ち彼の眞理に取り回さるべき約束とを語る。

第一章

彼如何に己の迫ひ求めし戀愛の爲に囚はれし乎。

次で我はカルセージに往きぬ。此處には淫行鼎の如く我を環りて沸きあがれり。我猶戀愛に於て在らざりき、然れども戀愛の觀念を戀愛しき、而て深く心に感せし缺乏は我をして己を憎むに至らしめぬ。(戀愛の缺乏ならん)。蓋は我は爲すべきよりも寡く欲望せし故なり。我吾が言へる如く戀愛の觀念を戀愛して、愛すべき物を索め、何等賤鼠の陷井だも有らざる平安なる途を惡めり。蓋は吾が內なる人は內なる食物の缺乏の爲に餓えたりし故なり。尙且我は朽ちざる食物の爲に、

アウガスチン懺悔錄

何等の食慾も何等の慾求をも感せざりき。而も是は我が飽きたりし故に非ず、唯空腹なりし故なり、是故に我之を擯斥せしなり。是に於て吾が靈魂は惱乱し、血氣に沸き、大膽に戸外に突出して、ヨブの如く觸るべき物を求めて自ら搔かんとせりき。尙且苟も我が觸るべき物にして、若心無き者なりしならば、我は之を愛するを能はざりき。愛することと愛さるゝこと、是れ我に甘美なりき。然れども若我が愛せし人を享有したらんには、一倍甘美なりしなり。

是に於て我肉慾の汚水を以て友誼の泉を溷し、地獄よりの煙を以て、其の清き光を掩へり。我斯く醜汚なりしといへ、尙且吾が虛榮心は度に過ぎ、吾が風采と頓智とを以て吾が名を知られんことを望みぬ。我又逆に身を戀愛に投せり。我其の桎梏を久しく受んことを渴求せしなり。嗚呼吾が神吾が恩愛深き者よ、爾如何に善なりし乎、如何なる膽汁を以て其の甘樂の盃を苦くせし乎。我は今愛せられぬ、吾が願望を遂げたりき。陰私の滿足の奴隷となり、自ら禍の鎖を身に卷着けて訪となしき。是に於て我は嫉妬、猜疑、恐怖、激怒、爭鬪等、熱熾の鋏杖を以て打たれ初めぬ。

第二章

悲劇を好む。

劇場亦我を魔したり、其の上に現はれ來る萬殊の吾が不幸の活畫、吾が炭火の上に薪を加へぬ。人の悲劇的悲運の活現を見て涙を溢さんと欲望する者は何が故乎。彼等は毫も其の悲運を受んと欲望するに非ざるなり。尙且觀者は之が爲に涙を溢さんとを欲望す。然らば彼等の求むる所の快樂は悲哀なり、果然是れ憫むべき痴事なり。蓋人の情緒は不健全なるほど一層深く悲劇の苦痛に動かさる。尙且人は實地

此の苦痛を感ずるとき、其の境遇を不幸と稱し、其の同情に擊たれて他の苦痛を分つとき、吾人は之を哀憐と稱す。然れども今劇場の傀儡の爲に、何の哀憐か之あるべけんや。傀儡豈觀客の己を助けんことを望まん乎。彼唯涙を溢すやう請はるゝのみ、而して其の溢す涙の多きほど、彼は無益の戲作を演ずる俳優を奬勵するなり。若此等の舊時代、又想像的禍難が、全然一滴の涙をも促す能はざる如き形狀を以て演ぜられなば、彼は怒を發して家に歸り、口を極めて惡評すべし。若幸に然らざれば彼其の座に住まり、兩の耳を澄して聽き、萬行の涙を溢す。然らば人は啼泣と悲哀を樂しむ乎。又吾人は謂ふべき乎、不幸は苦痛なりと雖ども、哀憐は快樂なりと。又悲哀無ければ哀憐無し、故に人情哀憐せん爲に悲哀を求む、是故に悲哀を愛するは又友誼の泉より來ると。然れども其の泉は何處に流るゝ乎。其の如何にして沸きたづ汚水の瀑布、恐るべき肉慾の煮え廻る池に墮ちし乎。此其の天の水源の透徹

る純潔を、茲に至りて其の自由意志に由りて之を失ひ、其の嫌惡すべき洪水の性質に變はるなり。然らば吾人は哀憐を逐出すべき乎、非らず、然らば吾人に哀憐を樂むべき時あるなり。然れども先づ不潔を戒めよ、嗚呼吾が靈魂よ、吾が神、吾が保護者、吾が先祖の神を畏れよ。彼は永久萬物の上に在り、美むべく、崇むべき者なり。然れば先づ不潔を戒めよ。蓋は我とても今も猶哀憐なくんばあらざる故なり。然れども昔劇場に在りし間、我は彼の情郎情婦が戀愛の禁果を嘗むるを——是唯劇場の模擬とはいへ——甚だ之を羨み、其の已むなく別れんとする時、哀憐せるかの如く悲み、哀憐を歡喜に等しき快樂として發見しぬ。然も今は我反りて邪徑に由れる成功を樂む者を哀(あわれ)み、之を失ひたる者を哀まざるなり。何ぞ耶、是自ら滅ぼす快樂、禍なる幸福を失ひし故なり。此の如き哀憐の一倍正當なる哀憐なるは言ふまでも無し。而已ならず、悲哀の中に快感ある無し。蓋は惱める者の爲に哀むこと、稱(ほ)むべき

慈悲の業なりとはいへ、眞の哀憐者は故意に悲しむべき事物を見んと欲すること無し。眞實誠實に哀む人は、己之を憐まんが爲に、惱める人あれかしと要求するが如きことを爲す能はず、惡意の恩惠と謂ふが如き物なき以上は、而して此かる物は有るべからず。是故に悲哀は時としては正當なるべし、然れども決して欲ましき物に非ず、嗚呼主神よ、是爾の我に敎ふる所なり、爾の靈魂を愛するや、吾人の愛より遙に潔き愛を以てし、其の哀憐は吾人の其より聖なる者なり、蓋は何等悲哀を感せざればなり。然れども誰か之に任んや。嗚呼我惱める人なりき。當時悲哀を愛したり、我俳優の脚色的悲運に於て、吾が哀憐の出口を求め、而して恒に吾が眼より涙を絞り取る部分が、最も我を樂ませたり。縱令迷へる羊又放れたる犢が疫病に奪はるゝとも何の怪事か之有らん。是より吾が煩悶の快樂來れり。――胸を貫く如き種類に非ず、蓋は我は吾が然く熱心に見る所の苦痛を、絶て自ら味はんことを欲せざりし

故なり、――唯是れ人生の皮相を瞥見したる戲作に過ぎざりき、――尙且其の吾が胸を裂くと爪牙の如く、膨れ昂がりて抑ふべからざる憤怒の沈痛を其の跡に殘せりき。嗚呼神よ、斯の如き生活果して生活と呼ぶ價あり乎。

第三章

彼修辭學校に於て「破壞者」の行爲に加はらざりき。

爾の誠實なる慈悲は恒に天涯より吾が上に懸りたりき、嗚呼我如何なる邪惡に身を費しゝぞ、我如何に吾が汚れし好奇心に追ひ從ひし乎、是は我を導きて不信の淵、虛妄なる惡魔の禮拜にまで陷れ、己が惡行の犧牲を彼に獻ずるに至れり。而も爾は恒に我を鞭てりき。我吾が肉慾の爲に考ふることを、罪惡の致死的結果を獲取せん策略を企ることを、

爾の敎會の內、爾の奧義の讃美の中にすら、之を爲すを畏れざるに至れり。之が爲に爾は重刑を加へて我を懲戒したまひしが、尙且其の寬大なる、吾が罪過の甚きに及ばざりき。嗚呼吾が神、吾が超絕せる「慈悲」恐るべき苛責者より吾が隱るべき隱家よ、尙且我頑梗なる頸を以て其の苛責者の中に彷徨し、爾の許より遠く遁がれて、爾の道に非ざる所の吾が道を愛し、脫走人の自由を愛したり。

又吾が硏學、世俗敎育と呼ばれたる吾が硏學、我を引いて法廷を仰視し、公事の成切を渴望せしめぬ。茲は最も狡猾なる者、最も敬重せらるゝ所なり。不斷己の盲目を誇とする者の盲目、實に此の如き物ありき。而して我今や修辭學科の絕頂に達したり。我や十分自負して高慢の泡を吹きしかども、尙且前日よりも愈に平靜なりしこと、是れ主爾の知る所なり。我彼の破壞者の蠻行には殆ど加はる事なかりき。此の殘酷且兇猛なる名稱、是れ第一等の朋輩の記號として仰望されし物なり

き。我破廉恥的羞惡の一種を感じつゝ、彼等の間に介まれたりき、彼等と比肩する能はざりし故なり。我恒に彼等と徘徊し、彼等の一人と友垣を結べり。尙且我は怯弱なる新入生に對して、其の「破壞」即ち襲擊を行ふ狀態と、其の惡意的娛樂を行ふ所の冒すべからざる粗暴とを憎めり。何物か此の惡鬼軍の行爲に如く物あらんや。何等の名稱か「破壞者」より彼等に適へる者あらんや。彼等先づ己を破壞し、而る後譎詐的精神を以て彼等を騙して之を誘ひ、同時に他を瞞着し、謊騙して以て快哉と喚べり。

第四章

シセロの「ホーテンシャス」彼の內に哲學の熱愛を起す。

此等の朋輩の中に無謀の年齡を過ぐせる間、我は修辭學の書籍を硏修

しつゝありき。我虛榮の愛に出でゝ、此の修辭學に由り、華麗にして嫌惡すべき成功を求めて、以て大に人に勝らんことを慾望したり。而て我普通の順序に遵つて、シセロなる人の著述に讀みかゝれり。其人の心は然もなければ、言語は萬人の稱むる所なりき。其書題して「ホーテンシャス」と謂ふ、哲學の研修を稱美せる一論文なり。其書吾が心を一變し、主たる爾に捧ぐる祈禱を一變し、吾が情望と希望とを渝へたり。其の刹那より空望の魔力は廢り、驚異と切情とを以て、我は不死の智慧を待望し發めぬ。是よりして吾が向上の道、神に對する歸順の路啓けぬ。蓋は我此書を、吾が舌端の研磨の爲、又吾が母の出費を以て買ひ難かるべく見えたりし修業の爲に用ひざりし故なり、——蓋は吾が十九歳の時、父は之より二年以前歿りしかば、——我言ふ、吾が舌端の研磨の爲に之を用ひざりきと、蓋は此書の推薦する所、演說の文體に非ずして、其の實質なるが故なり。

吾が心如何に燃へしか、如何に此の下界より爾に向ひて翔り往んとして燃しか、尙且我爾の吾が爲に爲したまへる所を知らざりき。蓋は智慧は唯爾の有なればなり。此等の數葉が吾が心に皷吹したりし智慧を愛する愛は、希臘語にて「Philosophy」(哲學)と稱せらる。人は動もすれば此の哲學に註まられて、其の誤謬を裝ふに、高貴にして眷愛すべく、尊敬すべき稱號を以てす。シセロも亦此書に於て彼と同じ時代、又古代に於ける此等誤れる敎師を殆と枚擧して之を難破せり。彼如何に明確に其の健全なる勸告を與へたりし乎。是は爾の靈が爾の忠良なる敬虔なる僕「使徒パウロ」の口に由りて敎へたまひし所なり、曰く「汝等愼むべし、恐くはキリストに循はず人の遺訓と世の小學に循ひ、空言なる理學を以て汝等の心を奪はん、夫神の充足れる德は悉く形體を爲してキリストに在り」(西二〇八、九)。

嗚呼爾吾が心の光よ、當時該使徒の此等の言語も、猶未だ我が知る所と

ならざりしは爾の知る所なり。尙且シセロの書籍より吾が衷に入り來りし一點滴は、此流、彼派に從ふ勿れ、唯智慧を愛し、之を求め、之を尋ね、之を握り、之を如何なる處に得るも、之をして逸し去らしむる勿れと云ふ勸告なりき。我激しく此等の言語に動かされ、燃やされ、煽られぬ。然れど一事の吾が熱心を沮落せしむる者ありき、其の基督の名を帶びざりし事也。蓋は爾の慈愛に依り、此名即爾の子、吾が救主の名は、吾が心の乳漿と俱に、吾が幼き胸に吸ひこみし所にして、今猶此處に隱れありて安然に橫れりし故なり。是故に其名を帶びざる書籍は——如何に廣く深き美しき物ありとも、——未だ全く我を動す能はざりしなり。

第五章

彼聖書を其の文體の爲に嫌忌したり。

是故に我は聖書を讀み見んと發心して、其の何に似たるかを發見したり。嗚呼是は高ぶる者には知られぬ物、小兒には未だ啓き示されざる物、反りて其の容貌に於ては陋く、其の效果に於ては貴く、其の本體は、秘密の中に隱れたる物なりき。我が如きは未だ之に窺ひ入り得る者に非らざりき、又其の前に平身低頭し得る者に非ざりき、蓋は我が始めて聖書に來りしとき我未だ前に記したる事件を感せざりし故なり。我よりして之を見れば、聖書はツリー〔シセロの名〕の威嚴に比して甚だ遜色あるを覺えぬ。當時吾が放埒は痛く其の制慾を疾みぬ。吾が目猶未だ其の深淵を看徹す能はざりしなり。眞や聖書の性質は赤子の生長と等しく生長すべかりき。然れども我は赤子たることを嫌ひ、膨れ昂かれる傲慢に居りて、我既に生長したりと想像せしなり。

第六章

彼如何にマニ教に捕はれしか。

是故に我は虛妄、狂愚、好色、多辯なる一種の僧輩の中に墮せり。彼等の口に惡魔の係蹄、愚かなる鳥を捕ふる粘黐ありき。是れ爾の聖名を有する文字、主耶蘇、基督の其、又聖靈即ち訓慰師の其を綴り成したる物なり。是等の名稱嘗て其の唇を離れたること無し。舌の音響、其の運動、恒に常に茲に在りき、而も其心は空虛にして眞理其の中に有ること無かりき。「眞理、眞理」と彼等の口恒に囁き、其の唇每に我に語れり。然も眞理は彼等の衷に在ること無かりき。彼等は獨り爾なる惟一の「眞理」に就てのみならず、併せて爾の所造物なる此の世界の原素に就て虛妄を敎へぬ。然れど我は無論哲學者に留意すべきに非ず、其の適爾の工に就て眞理を語る時だにも然すべきに非らざりき。我は吾が父なる

爾、最上善、最上美にて在ます爾を愛する愛の爲、一切此等を舍くべかりき。嗚呼「眞理」よ、「眞理」よ、吾が靈魂の深甚の精髓は當時此等の衒語學者輩が浩瀚なる書冊を以て、得々然として爾の聖名を頻りに轉換したりし間にも、如何に爾を求めつゝ嘆きたりし乎。此等の事物は我が爾を求めて飢渴きし時に甘美なる膳羞なりき。彼等は此の上に日や月や其他觀るに美しく食ふに甘き物を吾が前に供へぬ。然れども渾べて是れ爾の工にして爾自身なるに非ず。又爾の最初の工にてすら非ざりき。蓋は此等の物質的所造物は、其の如何に清く貴き物にせよ、爾の靈界は之より先に在りしをや。

我は此等爾の最初の工に對しても飢渴かず、唯眞理なる爾に向ひて然せしなりき。爾の中には何等變轉あることなく、又轉りて顯はるゝ影ある無し。然も尙且彼等は吾が前に此等甘美なる食膳を以て誘惑の饗應を設けぬ。蓋此等目の迷に欺かれたる心の戲作を愛するは、吾が

目擊する所の日や月を愛するの遥かに優れるに如かざるなり、(此等は兎に角吾が目に眞實なる物なり。) 然も尙且我之を食したり。蓋は之を爾に取りて代へたる故に之を食へり、然れども嗜慾を以てせしに非ざりき、蓋は其中に爾の香氣を得ざりし故なり。爾は此等の戲作に非ざりき、此等は我を養はず、否反りて我を餓死せしめんとしぬ。夢幻の食餌は如何に眞實の食餌に似たる乎、然れども夢見る者は嘗て飽くを覺ゆる無し、蓋は其の食餌夢なればなり。此の如き食餌は決して爾に似るべくも無し。何となれば當時だにも爾は恒に我を戒愼したればなり、蓋は此等食飾は物質的觀念、想像的事物にて、其の精確なる程度、吾人が天地の間に肉眼を以て見る所の實物より夐に劣れし故なり。此等の鳥、又獸は其の能く見ること、吾人人類に異る無し。其の眞實、現實なる程度、此等想像の產物よりも夐に優れり。又想像其物すらも、其の現實なる程度に於て、吾人が此の上に建築する所の烏有の無限の連續

よりも絕に優れり。然れども我當時此等無味なる糟粕を以て養はれたり、然も嘗て肥ゆる無かりき。

然れど健全ならんとして我が、爲めに疲れたる所の爾、吾が愛よ、吾が見る所の物體の如何に天に在りとは云へ、爾は此等の物の一に非ず、又何等吾が見ざる所の物にも非ざるなり。蓋は爾は創造主にいまして、此等を其の主要なる工の中にも算へざればなり。然れば爾は吾が信せし所の理窟、殆ど成立し得ざる所の物體の理窟より、如何に遠く立ちたまへり乎。既に成立せる所の吾人の物體に關する抽象的觀念、乃至物體其物は吾が理窟に比すれば更に精確なるが、尙且爾は此等の物の一にも非ず、爾は物體の生命なる靈魂にてすらも非ず。是故に物體の生命は、物體其物よりは更に優り更に確實なり。而も爾は靈魂の生命、生命の生命にして、爾已に生命を有して永劫變ること有る無し。嗚呼爾吾が靈魂の生命よ、然らば爾何處に在り乎、我が爾の前より遙に追ひ出

され、我が豆殼を以て養ひたりし、其の豕の豆殼をも食ふことを得ざりし間、如何に遙に我を立ち離れたまひしとする乎。蓋は文法家、詩人の戲作すら此の狡猾なる織物よりは遙に優れり。メデヤは〔希臘神話中の一仙女〕の空中の飛揚に就て歌ふ詩句と歌曲は、五個の原素が五個の暗黑洞の爲に斷へず變化すと云ふ事〔マニ教者の妄想〕よりも有益なること疑ある可からず。此等の空談は何等事實在ることなく、而も能く之を信ずる者を迷殺す、然るに我は彼の詩句、歌曲の中に眞個の滋養を發見し得たりき。且メデヤ其人と其の飛揚に就ては、設若我之を口にして歌ふも、其の事實なりしを主張せざりき。他人の之を歌ふを聽くも、又嘗て之を信ずること無かりき。然るにマニ教の荒唐無稽に至ては、我反つて之を信じたりき。

嗟呼我、如何なる梯梯を經て、此の地獄の底に墮ち來りし乎。嗚呼吾が神よ(我爾に告白す、爾は吾が告白せざりし時すら、我を憫みたまひし故

なり)。我は眞理の缺乏の爲、實に唯我が爾を求むるに肉情を以てして爾の我を動物より優等ならしめし其の智慧を以てせざりしが爲、徒に努力しつゝ地獄の底に墮ちしなりけり。然れども爾は我が最下層より低く、吾が最上層よりも高く在しき。是故に我は彼の厚顏無智なる淫婦の虜となりぬ。此淫婦はソロモンが其の比喩の中に語れる者なり、彼女は戸の入口に椅子を置き、之に坐して行る者に告げて曰く、「快く秘密の食を喰ひ、甘美なる盜泉の水を飲め」と(箴言九〇十三—十七)。是れ我が頸に眼の慾を追ひ求めて彷徨ひ、而て己の爲に掇ひ得たる如上の食餌を反芻つゝあるを彼女の見つけたるが故なり。

第七章

彼マニ教の荒唐無稽を告白す。

我眞なる者を知らざれば、此等愚昧なる瞞着者の疑問に遭ひて、何等の答辨を有たざりしとて、誹謗と難題の爲に震盪されたり、曰く惡の源因は何か、神は具體に由りて限られし乎、彼に毛髮若くは爪牙有り乎、多妻漢、殺人漢、血羶き犧牲を獻ぐる者、彼等を義人と考ふるを得べき乎云々。是等の疑問は吾が無智を惑はせぬ。我吾が背を眞理に背けながら自ら之を求めつゝありきと思へり。蓋は我未だ惡は善の缺乏にして、非有の隣なることを知らざりし故なり。吾が目物體の外見る能はざりき、吾が心物質の觀念以外何物も有らざるに當り我如何に之を見ることを得ん乎。

我神の、測量すべき部分を有せざる靈なることを悟ること能はざりき、

靈の存在は容積に非ず、容積に在ては部分は全體より小なる故也。且其は無限なるにもせよ、其の限定したる部分は、其の無限より小なり、然れば靈なる神の如く遍滿なること能はざるなり。我は吾人人類の神に肖たりと云ふこと、即ち聖書が吾人が神の象に造られたりと言ふこと、果して正當なりやと云ふ如き觀念を毫も有せざりしなり。且我眞正なる內在の義、即ち便宜に從ひて判斷せず、獨全能の神の正當なる律法に由りてのみ判斷する所の義を知らざりき。一國一時代の習慣は其の國其の時代に適するに過ぎざるも、神の律法は一切所一切時に於て平同なりとす。然も我アブラハム、イサク、ヤコブ、モウセ、ダビデ其の他大凡神の口に美めらるゝ所の人々は、此の律法に由りて義なりしことを知らざりき。彼等は唯痴人の爲に不義と稱られしのみ、此等痴人は人の審判に由りて判き、人類全體の道德を度るに區々たる自家道德の規則を以てす、恰も猶ほ武器に就て識る所なき人が、脛當と履とを頭

に蒙り、兜を其の足に著けて、而して其の相適はざるを訴ふるが如く、又午後よりは聖日なりと宣告せられしに當り、其の朝に店を開くこと許されながら、十二時過ぎて之を爲すを許されざるが爲に不平を吃く者の如く、又或る大なる家に於て、膳夫の手を汚すべからざる事物を、奴隷に之を操るを命ぜられ、又食堂に於て禁ぜられたる事物の、厩に於て行はるゝを見て、一家又一家族の間に、凡の者が同時に同事に當るを得ざるを怒つて不平を唱ふる者の如し。

一事件の昔許されて今許されざるを聞き、又神が一時的の理由に由りて、古人に此の誡命を與へ、吾人に他の誡命を與ふるを見、吾人が古人と平同の義に服せるにも拘らず、皮相の差別を見て憤ふる者は、此種の人なり。又一人、一時、一家に在つて特殊の職務の特殊の會員に適するを見、昨日義かりし物、今日既に義しからず、既に遂げられたる物は廢せらるべく、一時代に於て命ぜられしもの、他の時代に於て罰せらるべきを

見て憤るも、亦此種の人なり。然らば正義は無常にして變轉すべき物乎、否唯正義の宰る所の時代平同に走らざるのみ、是れ其の時代なるが故なり。是故に地上に住む日少なき人類は、過去を拒みて現在を喜ぶ、是れ彼等は古代と其の國民を治むる所の律法と、今日活動せる所の律法の間の關係を實際に見る能はざる故なり。其の見得る所個人のみ、時代のみ、家庭のみ、此の家庭には、特殊の事物が、特殊の時間に、特殊の成員、部分、又個人に適せるなり。

大凡此等の事物は我之を知らず、之を思はざりき。彼等自ら吾が眼に壓逼し來りしも我之を見る能はざりき。我詩を作りぬ、此の詩の中に我吾が欲する所に吾が好む音步を置くを得ざりき。每句各其の格を有し、同一行の中にすら同一音步、凡の場所に適せざりき。尙且作詩の技術は其原則をして特殊の場合に適せしめず、反りて惟一の中に一切を包含せしむ。神の律法も亦然り、我は此等善且聖なる人々の服從せ

し所の正義が作詩術よりも一倍優越せる、稱美すべき方法に由りて、惟一の中に一切を包含せること、又變化せずして教訓を與へ、一時に一切を與へず、時代の變化に隨順して之れを與ふることを感知すること能はざりき。且我盲意に此等の聖なる列祖を有罪と宣告しぬ。實や彼等は獨神の誡命と皷吹に由りて、能く現在を理めしのみならず、神の彼等に啓告するに循ひて能く未來を預言せりき。

第八章

マニ教徒を責めて、其の憎むべき邪惡と犯罪とを暴露す。

夫れ何の時か又何の處か「汝心を盡し、精神を盡し、意を盡して神を愛すべし、又汝の如く其隣を愛すべし」と曰へることを答むる者あらん乎。是故に天性に逆ふ所の犯罪は、常に到る處に憎むべく罰すべきなり。

ソドムの民の犯罪實に此の種に屬す。凡の國民若し同然之を行はゞ、彼等は神の律法の前に、同一程度に於て犯罪者たるべし。是れ神の律法は人類を斯く互に害ふべく造りしに非ざる故なり。吾人と神との間の同情は、神自ら之を造れる人類の天性の、法外なる肉慾の爲に汚さるゝ時に於て破壞せらる。然れども人間の習慣に逆く所の犯罪は、此等變化を免れざる所の習慣を尊敬すれば避くるを得。規則は是なり、曰く內國人も外國人も、一國又は一國民の習慣法律に由りて制定したる交互の約束を恣に破るべからずと。是れ部分にして全體に逆くは、其の天性に乖るが故なり。是れ全體の一部分なるが故なり。

然れども神若し一國の法律即ち約束に背いて一事を爲すべく命ずるに當りては、此の如き事物の從來行はれし事なきに拘らず、是は必ず行はざるべからず、若し其の事中絕せられたらんには、是れ必ず繼續せざるべからず、嘗て命せられざりしならば新に命せざるべからず、蓋は茲

に其の王國に君臨せる一王あり其の王自身も、又其の祖先の一王も、曾て下せしと無き命令を降すこと合法なるに當り、又之に服從すること國民たるに背かず、之に不服なること國民たるに乖るに當りては——。何となれば人類社會の一般契約は、彼等須く其の君主に服從すべしと曰へばなり、——況んや吾人一切所造物の主たる神に向ひ、猶豫なく其の一切の命令に是れ從ふべきは當然なりとす。蓋は人間社會の政府に於て、小權は大權に服する如く、一切は神の隷屬なればなり。此の規則は犯罪の場合にも成立す。夫犯罪には損害を起すべき欲望を有す、或は侮辱の方法に由りて、然らざれば毀傷の方に由りて、若くは敵對者間に於ける如く交復讐の爲に課せられ、然らざれば盜賊の旅客を刼掠する場合の如く、或は毀害を避くる爲に、我は恐怖すべき人の爲に、或は不運者が幸運者に於ける如く、或は繁榮者が現在又未來の競爭者に於けるが如く、嫉妬の爲に、或は演武場の觀客、又は彼の他を嘲り嗤ふを事

と爲る者の如く、純粹に殘酷を樂しむの情よりして之を爲す、此等は優勝の野心又視覺、感情の豪壯なる感動、若くは其の一、其の二、乃至其の一切の欲望より起る所の不法の發作に外ならず。人は斯くして惡逆なる生活を導き來りて、神に對する三戒、人に對する七誡、十絃の琴、至高、至美なる爾の十誡を輕侮す。

然れども爾に對して如何なる惡業、如何なる犯罪を行ふを得る乎。蓋は爾は汚され害はるべきに非ざればなり。尙且爾は人の爾に對する犯罪を罰す。蓋は彼等の爾に對して犯罪を犯せる同時に、己の靈魂を害ひ、其不義は虛僞を重ぬればなり。是れ何に由りて然るや、爾の造り且命じたる性慾が、容るされたる事物をば、濫用の爲に、容るされざる事物をば天性に乖りて逆用せんと欲する煩惱の爲に、之を敗り、之を變ふるに由りてなり。且夫爾は彼等が其の意思と言語を以て爾に逆き、良心の棘を蹴るが故に之を罰す。又己の好惡の誘導に從ひ、朋黨、分爭を

事として之を樂み、大膽にも其の社會に對する義理を放に拒絶するが故に之を罰す。

「生命の泉」、全世界の創造者、主宰者なる爾を棄てゝ、人自ら傲慢なる獨立を狹み、全體ならぬ部分に、虛僞の善に己の心を安置するに當り、結果は即ち上に述べたるが如し。是故に謙遜と敬虔とは爾に反るの道なり。爾は惡き習慣より吾人を淨め、懺悔したる罪を赦し、囚れたる者の嘆息を聽き、己の爲に吾が鑄造れる鋏鎖を碎く、若惟吾人復び汝に向ひて、空想的自由の頭角を昂げず、分を越へて得る所あらんが爲に、己の全力を賭することなく、一切中の「至善」なる爾に勝りて、己の善を復愛する無くんば。

第九章

此の罪と他の罪、人の審判と神の審判との區別。

然れども惡事と犯罪と大凡千萬の非違との中に學者の過失と稱すべき一種の犯罪あり。此等の過失を、識者は完全の法に由りて之を咎め、尙且結果を望んで之を稱美す。蓋は此等の罪惡は豐かなる嘉穗を預約する所の青葉に對比せらるべければなり。又或る行爲は惡行又は犯罪に似つゝ、吾が主神なる爾に對し、又社會の紐帶に對して、睽違する所なきが故に、尙且犯罪と爲らざる者あり。例すれば一定の時期(他の時期には然らざるも)に相當したる或種の財產あり。是は不法なる貪慾の嫌無なしに人の之を獲取し得る物なり。又一見甚だ野蠻らしく見ゆる或種の刑罰あり。然も若し矯正の目的を以て、許諾せられたる權力を以て之を行へば、必ずしも殘酷を樂しむの意を含蓄するものと

同一視すべからず。人の非難する所の諸の行爲も、爾の證認に由りて反りて賞められ、人の賞讃する所の諸の行爲も、爾の爲に反りて有罪の宣告を受く。蓋は行爲と當事者の動機の關係と、乃至其の時代と云ふ不可測なる境遇とが、始終變易すべき故なり。

然れども爾若し卒然、斬新不意なる行爲を命じて行はしめたまふに當りては、縱令爾前には之を禁じたりしにもせよ、――爾は一時其命令の理由を隱すにもせよ、――又其が人類の或種の社會の契約を破るにもせよ、誰か其の必ず實行すべき物なるを疑ふを得んや。蓋は爾に服從する所の社會のみ、獨り正當に認許せらるゝ物なればなり。是故に爾の命ずる所を能く知る者は福なり。蓋は大凡爾の僕の爲す所は、現在に必要なる事物を供へ、來るべき事物を預言する爲に爲さるゝ故なり。

第十章

植物の生命に關する荒唐なるマニ教の信仰。

當時我之を知らず、寧ろ爾の聖なる使徒と預言者を嘲笑したりき。然も其の結果は唯爾我を嘲笑せしに止りき。我漸次誘はれて荒唐の極に達し、無果花の實の摘まるゝ時に落涙し、母樹が其の實の爲に乳汁の涙を流して啼くと云ふが如き事を信ずるに至れり。尙且聖徒にして其の實を食ひて之を消化せば、聖徒以外の者此の實を摘みて罪を犯したりしとも、其聖徒の祈禱に於て嘆息流涕するに當り、其口中より天使否神の斷片を吹き出すと。而て又此等至高の眞の神の斷片は、若其の撰まれたる聖徒の齒と胃液に由りて解放せらるゝに非ずば、終に此の果實の中に幽囚せられて出る期なけんと。嗚呼我哀むべき人なるかな。地上の果物は人の爲に實を結べるに、之を以て人にも益して寵む

べき物と信じたりき。此故に若マニ教徒ならぬ餓死の人、一餐の食を乞ふに當り、若我此の果の一顆を與へば、死刑に當る重罪者と稱らるべかりき。

第十一章

モニカのオウガスチンに關する憂悶と夢想。

爾上より其手を伸べて此の闇黑の深淵より吾が靈魂を救ひ、以て吾が母なる爾の忠信なる婢の熱涙に對へたまへり。蓋は彼女の吾が過失の爲に哭くこと、有らふる母の其の子の爲にするより益しても痛切なりし故なり。彼女は爾が之に與へし信仰と、聖靈の光とに由つて、我が既に死にし者なるを看破りしなり。爾は母に聽きたまへり。嗚呼主爾は彼女に聽き、其の跪いて祈るに當りて地に注ぎし涙を侮りたまはさりき。然り爾は母に聽きましき。然らざれば彼の慰安的夢想は何處より來りしや、實に此の結果に由りて彼女は我が彼女と同に住み、同じ食卓に於て食ふことを許したり。是より先、母は吾が冒瀆の罪を恐れて、我が然かすることを禁じたりしなり。母一夜夢みぬ、其の夢に母は哭げきつゝ兩足もて定木の上に立ちしに、身より光を發てる一少年、母の方に向ひて來り、母を見て微笑せるを見たり。彼母に其の憂悶と日々の涕涙の理由を問ふ。(天使の例なるが如く、知らんと欲する爲ならず、教へんと欲する爲なり)。母之に告ぐるに吾が滅亡を憂ふることを以てせしに、彼母を慰めて曰く、目を注めて見よと。蓋は彼女の在りし所に、我亦俱に在りし故なり。母目を注めて、同じ定木の上に、己の側に我が立てるを見たり。嗚呼是れ母の心の聲に爾が耳を傾けたまひしに非ずば、果して何處より來りし乎。

嗚呼爾全能なる至善よ、吾人の各自を庇護したまふこと、宛も彼唯一人

を庇護したまふが如く、一切の人類を庇護したまふこと、其の唯一人なるが如くしたまふ者よ。如何にして此事重ねて起りし乎。即ち母我に告ぐるに其の夢想を以てせしかば、我母の決して失望せざるやう之を解釋せんと試みて、他日我が在る所に母も在るべければと言ひしとき、彼女は母たる躊躇も無くて答へて曰く、〔否とよ彼〔耶蘇〕は己の在る所に汝も在るべしと曰はず、汝の在る所に彼亦在るべしと曰へり〕と。嗚呼主、是れ吾が最も樂き記憶として、〔且吾が數語る所なりき、我爾に告白す、吾が母の口を通じて對へたまひし爾の答と、其の答の迅速なりしことの爲に我自ら一倍多大の感動を受けしこと、――蓋は母は吾が諂諛的挿入の爲に誘はれず、反りて即時に彰明較著なりし事物を、我は母の之を語りしまで見ざりしとはいへ、母は疾く之を看破せし故なり、――夢想其物に勝れることを。唯此の夢想に由りて、此の敬虔なる婦人の長き未來の歡喜が、其の現在の不幸に慰安を與へん爲に預告せられぬ。

蓋は猶約九年の時日の間、我は泥濘と闇黑の中に、虛妄の深坑を轉輾し數上に登らんと試みて反りて愈深く墮落せり。大凡此の間、其の貞潔忠信、莊敬なる寡婦が、〔此は爾の日に貴とき者なりき〕年々成長する所の希望に不斷の嘆息と流涕を加へて、始終禮拜の時に於て吾が一身の救拯の爲に爾に哭きて止まざりき。見よ彼女の祈禱、爾の目に留まりぬ。然も尙且爾は我が猶其の闇黑の中に轉ずるを容したまへり。

第十二章

其子の改心に就き、モニカが受けし神の應答。

同時に爾の與へし他の應答を、我が心に憶ひ起す。然れど我今其の多分を舍く、蓋は我一倍壓迫し來れる告白を爲すべく急げばなり。且我今其の多分を遺れたり。爾は其の祭司、即ち爾の敎會の內に人となり、

爾の載籍を精讀せし一監督の口を通して、他の應答を與へ賜へり。吾が母彼に其の我と語らんこと、其の吾が虛妄を駁たんこと、我に善と惡とを敎へんことを請へり。此の如きは彼其の適宜の聽聞者を得るときに爲る所の習慣なりき。然れども彼は吾が母の言を拒めりき。我が後之を見るべきが如く、彼智くも之を拒めり。蓋は我は當時吾が母彼に語りし如く、此の異端の新奇に心奪はれ、己自ら其の詭辯を弄して既に多數の愚人を惑はしたりしを以て、猶未た己自ら學ばんとする心無しと、彼曰ひて辭せし故なり。彼猶語を加へて曰く、「彼を棄てゝ其の爲る處に委ねよ、惟獨彼の爲に主に祈れ、然らば彼自ら其書を讀んで、其の虛妄不敬なる所以を識るに至らん」と。

同時に彼自ら母に語るに、己の幼時、迷へる母の爲にマニ教徒に托せられ、專ら彼等の著述を讀み、之を謄寫するを以て事としたりしが、後漸次に、他の議論又駁論を待たずして、自然に此宗派の棄つべき物なるを看

破し、一朝忽ち之を棄て了りし事を以てせり。然れども母は猶肯せず、強て彼に我に遇ひて論破すべく、涙を以て哀願せしかば、彼終に憤を含んで曰ふらく、「往け神汝と共に在らんことを、此の如き多涙の子の滅びんこと有るべからず」と。其後母毎に我に語りし如く、彼女は此等の語を天よりの聲と承けにき。

第四篇

彼其の九年間マニ教に屬し他を誘ひて同一虛妄に歸せしめしことを懺悔し、彼其の非常の沈痛を以て哭きし所の友人の死に機會を得て、眞友と僞友の間の差別を明にす。彼又「美」と「適應」に關する著述を爲し、又アリストートルの「範疇」、又世間的藝術の教科書を、其の二十歳の齡に於て、教師と待たずして容易に之を解し得たることを語る。

第一章

彼が他を惑はしたる時期と其の方法。

吾が十九歳より二十八歳に至る此の九年の時日の間、我は種種愚なる慾望に由り、被惑者と、熒惑者、被欺者にして又欺騙者なりき。其手段、外は世人の世間的と稱する所の此等諸の技術と修業に由り、內は虛妄なる宗敎——時には傲慢、時には迷妄、恒には空虛なる——宗敎の道に由れり。敎育は我を牽ひて世人が名譽と稱ふ所の玩具、劇場の喝采、詩文の懸賞、乾草の冠冕に對する競爭、舞臺の痴戲、情慾の煩惱を追ひ求めし

め、宗教は我に教ふるに此等「撰ばれたる聖徒」と稱はれし人々に食物を供養し、之に由りて肉體の汚染を潔除せんことを求めたり。是は謂ふる聖徒の胃腸內の製造所に於て、吾が贖罪の爲に許多の天使と、許多の神とを彼等の製造せん爲なり。此の如き事物を我吾が友人、即ち我が爲に欺かされたる者、又我と與に欺かれたる者と同じく之を行ひき。

傲慢者をして吾を嘲み笑はしめよ、又其の靈魂の健康を得んが爲、猶未だ神の爲に鞭ち痛められざる人々も、亦然かせよ。嗚呼神よ尙且我は神の榮光の爲に吾が羞辱を爾に告白す、我請ふ爾我を忍び吾が既往の漂泊的迷妄を記憶の中に追跡し、且歡喜の供養を爾に獻ぐることを容せ。蓋は若爾微りせば、我自ら己の滅亡の相ならずして何ぞや。又我が健全なりし時すら、我は爾の乳を呑み、朽ちざる糧なる爾に由りて養はるゝ嬰兒に非ずして何ぞや。又人は其の徒人なればとて何なる乎。

然り彼の强き者力ある者をして我を嘲み笑はしめよ、尙且弱き者貧き者なる我は爾に向ひて告白せんのみ。

第二章

彼修辭學の教授となりしこと、妄を蓄へしこと、賣卜者を賤みたることゝ。

是の時に當りて我修辭學の教師となりぬ。而して我自ら貪慾に克つ能はざりしかば、言語の戰爭に捷利を得べき技術を儁りぬ。尙且(嗚呼主爾能く知りたまふ)我は世人が正直と稱するに從ひ、此等正直なる學生のみを擇び、而して又我は彼等に詭道を教ふるに正道を以てしたり。是れ彼等が無罪者を敗らん爲に非ず、唯其の時ありて有罪者を救ふを得んが爲なり。且夫神よ爾は遙に我が泥濘の中に轉じ、黑煙の中に迷

ひながら、猶同時に弟子輩に對する吾が熱心の中に、細かなる敬虔の發火を見そなはせり。唯弟子輩が虛榮を好み、虛妄を慕ひ求むとはいへども。當時我法律に從ひて結婚せしに非ざる一女子と同棲し、彼女に於て吾が愚なる放浪的情慾を和めたり。尙且唯彼女一人と同棲し、彼女に對して信實なりき。是に於て我吾が實驗に由りて、子を得る望を以て契りたる貞實なる結婚と、放肆なる肉慾の交換との間に、月鼈の差異あることを學びたり。後者の中には何等子を儲くべき慾望なし、唯若其の一旦生まるゝに及べば、之を愛せざる能はずとはいへ。

我亦記憶す、我が劇場にて暗誦すべき詩句の懸賞の爲に、競爭せんと決心せしとき、一賣ト者人を我に遣して我が懸賞を獲んが爲に、何を供養すべき乎と曰はせしことを。我は心から此等のト占を憎みたりしかば、答へて曰く「設や我が獲る所不朽の金冠なるにもせよ、吾が勝利を買ふ爲には蠅一頭だも供養せじ」と。彼は例に生物を屠りて供養を爲し、

且此の供養に由りて其の鬼神に我を助けんことを請はんと曰へりき。然れども嗚呼吾が心の神よ、我が此の罪を斥けしすら、爾を愛する愛より出でざりしを悲む。蓋は我光輝く天體の外、何等之より愈れる者を思ひ得ざるに當り、如何に爾を愛するを得ん乎。靈魂が此等の愚昧なる妄念を慕ひて嘆くに當りて、此の靈魂は爾に畔いて娼婦と戲れ、虛妄に委ね、風を養ふ者に非ずして何ぞ乎。實や我賣ト者をして己の爲に鬼神に供養せしめざりしとはいへ、同時に我己をマニ教の迷信に由りて鬼神に供養せし者なりき。蓋は吾人が鬼神に供養するに當り、即ち己の虛妄に由りて彼等鬼神に嘲笑、詬罵の資糧を與へしに當りて、是れ吾人は風に供養せし者なればなり。

第三章

彼の星占學に對する傾向、如何に智き老醫師の爲に矯正されしか。

是故に我は彼等星占學者、即ち數學者と稱はるゝ人々に商量することを、彼等が卜占の目的の爲に何等の靈にも供養し祈禱せずと云ふ理由に由りて慎むことを、殆ど必要とし考へざりき。然れども斯の如きは眞の敬虔なる基督信者の爲に當然禁ぜられ、且罪せられたり。蓋は爾に告白して「我を憫み、吾が靈魂を治したまへ、蓋は我爾に罪を犯したればなり」と言ふを善とし、又爾の慈愛を、誤りて罪を犯すの自由を許すものと思ふべからずして唯主が「見よ汝健全になれり、復ひ罪を犯す勿れ、恐くは前より惡き事汝に起らん」と言ひしことを憶ひ出づるを善とすればなり。此の健全若くは平康、嗚呼是れ星占家の破壞せんと努むる物なり。彼の言に曰く、汝の犯罪の必至の原因は天より來ると。又曰

く「金星、土星、又火星實に之を爲せり」と。是故に唯血肉にして又傲慢なる腐敗の奴に過ぎざる人は、當然其の刑罪より免るべく、罪科に對するの非難は、當然蒼穹と星辰の創造者又主宰者の頭に落つべきものなりと。是故に各人に其の行爲に循ひて報酬を與へ、「彼等星占學者を罰し」己を卑し、罪を悔ひたる心を輕しめたる所の彼は、美妙、又一切義の源泉なる吾人の神に非ずして誰ぞ乎。

當時茲に其の醫術の技倆の爲に相當の名譽を博したりし大智者ありき。其の人は偶市長の職に在りて、我が劇詩の競爭に於いて贏ち得し所の冠冕を、其の手を以て吾が頭に戴かしめたる其人なりき。噫吾が其の頭は錯亂したりき。彼は之れを醫し得べき醫師ならざりき。蓋惟爾のみ獨此の疾病の醫師なりし故なり。尙且爾は此の老人に由りてさへ、我を援けて吾が靈魂の治癒に盡したまへり。蓋は我彼と相識りしより、大に彼の會話を喜ぶに至りし故なり。彼の會話は彼自ら其

の辭令の練磨を主張する無きにも拘らず、其の判斷の豐富なるに由りて、快適と重量とを併有せるものなればなり。彼は吾が所說を總合して、我が星占學の書籍を研修せることを察しぬ。是を以て彼は殆んど慈父的恩愛を以て我を誡め、其の書を棄てゝ復び貴重の時間を此の如き荒唐無稽の事物に費すこと勿らしめんとす。彼我に告ぐるに、己亦若年の際此の職業に由りて生活せんとの目的以て星占學を學びしこと、其のヒッポクレイト〔希臘の大醫〕を解し得しが故に、彼が此等星占の書籍を解し得ざりきと我が想像すべからざること、然も己此等の書籍を棄て醫術を採用したりしこと、蓋は其の全然虛妄なるとを發見し、自ら莊敬なる人なる故に、未だ虛妄に由りて食(パン)を得るまでに墮落する能はざりし故なることを以てし、更に語を加へて曰く、「然し君は既に其の修辭學に生活の便宜を有したまへり。君は必要に由るに非ず、唯好奇心の爲に此の虛妄を研窮したまへるなれば、我が此の技術に就て君に

語る所を容易に信ぜらるべきなり、蓋は此の技術は、之れに由りて生活し得んと望む人の完全を以て我自ら之れを操りたるものなりしが故なりと。

其時我彼に問ふて曰く、然らば星占家の預言の數其の眞實なることを證するは何が故かと。彼答へて己も亦均しく之を能くすべし、「蓋は一切自然の中に貫通する所の偶然の能力に由りて然り、是故に人は詩人の詩句にすら神託を索めんとせり。彼の詩人は全く之と異りたる事物を賦詠し、思想したるに非ずや、然も其の詩句が每々當面の事件と接觸し來りしに非ずや。且夫無意識に天賦の本能に由りて啓導せられし靈魂が、問者の目的に關係すべき種類の言語を、技術に由らで偶然に發揮するは、何等の奇怪あることなし」と。嗚呼神爾我に此の一道の光線を彼より、又彼を通じて與へたまへり。是に於て我吾が記憶の中に自來我自ら確證すべき疑問を銘しぬ。然れど猶當時に在つては、彼も、

將た善良にして先見あり、星占の全系を笑罵せる所のキプリデアスなる吾が親愛なる青年も、未だ我を說いて之を拋たしむる能はざりき。蓋は我一方に於ては此の權威の重量を稱るが故、他方に於ては星占家が眞實を語るに當りて、是は彼が星を讀む技術に由らず、偶然に啓導せられしと云ふ事に就き、我が要求する所の明確なる證據を猶未だ發見せざりし故なり。

第四章

其の虛妄を以て誘惑したりし友人の死、及び其の死に於ける彼の哀痛に就て。

當年、我始めて鄕里タガステ市の敎師たりし後、幾もなく同年の因に緣つて相親みたる一友人を得たり。蓋は吾人は今等く將に人生の花を

開かんとする時代に在りて、加ふるに其の專門を同ふせし故なりき。二人は小兒として俱に成ち、同一學校に上り、同一遊戲を共にせりき。尙且彼は小兒としても少年としても、眞の友情に於てせる友人に非ざりき。蓋は友情は爾の吾人に賜ふる聖靈に由りて、吾人の心に普く注ぐところの其の愛を以て、爾に附ける人々の間に、爾自ら友垣を結び着けたまふに非ざるよりは、虛妄たるを免れざるが故なり。然れど二人の情は研修を與にするの熱心に由りて密着したれば、其の關係や甘美なりき。我は眞の信仰より彼を誘惑して、吾が母の然く我が爲に哭きたりし例の虛罔、有害の妄誕に歸依せしむることにすらも成効したりき。蓋は彼基督信者なりしかど、唯一少年に過ぎざりしかば、未だ深厚、且實驗的ならざりし故なり。是に於て彼我と同に其の虛誕に彷徨し、吾が靈魂は一日も彼無くんば在る能はざりき。而も今や復讐の神、茲悲の源泉、さしも不可思議なる手段を以て、吾人を爾自身に歸順せしめ

たまふ所の爾は、其の遁亡せる奴隷どもの、其の遁亡の上に壓逼し來たまへり、――見よ爾は此の世より彼を取り去りたまへり。嗚呼是れ當時人生の一切の快樂に勝りて我に貴とかりし此の友情に於て、僅々唯一周年を盡しゝ曉なりき。

人誰か凡爾の美むべき事蹟を數ふるを得んや。彼唯已に實驗したりし其れだにも敎ふるを得ざるなり。嗚呼吾が神當時爾の爲したまひしは何事なりし乎。爾の定謨の深さ如何に測り難きかな。彼熱を患ひて長く垂死の發汗の中に人事不省にして横はりき。有らふる望竭きしかば、彼其の猶人事不省にして在る間に沒式(バプチスマ)を授けられたり。而も我は之を意に介せざりき、蓋は我彼の靈魂の我より聞し所を堅く保ちしことを確信し、其の無感覺なる體軀に行はるゝ事を問ふを用ひずと思ひし故なり。事は全然意外に變はれり、蓋は彼蘇りて痊へたればなり。我彼と語を交へ得るに至るや否、――彼之に耐ふるに至りしや否

之を爲せり、蓋は我絶へて其の側を去らず、吾人は交互に結着せられたればなり、――我彼が思想し感覺する能はざりし際に受けたりし其の沒式(バプチスマ)に就て、譜諜を試みたり。彼亦之に應せんと思ひたればなり。是時に當つて彼既に己の沒式(バプチスマ)に就いて聞く所ありたりしなり。彼吾が言を聽くや、敵を忌避する如く我を忌避し、駭くべき新興の勇氣を以て我を戒め、若我が猶彼の友人たるを欲せば、復た此の如き事を語ること勿かれと曰ひぬ。

我驚き且惑ひ、復た一言なく、其の元氣を回復するを待ち、其時に及んで徐に彼に我が思ふ所を告ぐべしと心を定めぬ。意外にも彼、吾が狂亂の境から劈き取られ、爾の天國に保存せられたり、嗚呼是れ反りて吾が慰安の爲めなりけるなり。爾後數日にして、我偶彼の傍を去りたりし間に、熱反りて彼死したりけり。此の悲哀吾が胸に暗黑の如く落ち來れり、我が眺むる所に、死の外何等視る所なく、吾が故國は苦痛の國とな

り、吾が父母の家は禍の家となれり、我が彼と同に享けし有らふる快樂は、彼の死亡せし今怖るべき沈痛と變じぬ。我一切曾識の光景を忌みぬ、彼今其の所に在らざればなり。彼等重ねて我を見て「彼又來らん」と曰ふこと無かりき、嗚呼是れ彼の生きたりし日に彼の不在の際彼等の爲すべき例なりしを。我自身今吾が爲に不可解となれり、我吾が靈魂に問ふて曰く、汝何ぞ然く重濁なるや、何ぞ然く辛辣に我を攻むるやと、而も我何等の答語を得る無かりき。若我「神に由りて望を懷く」と曰はば、吾が靈魂は忽ち拒んで肯せざりき、蓋は彼の喪ひし吾が親友は我が靈魂に命じて望を懷かしむる其の幽靈〔神を指す〕に比すれば、更に優りて更に現實なりし故なり。是に至りて涕淚是れ惟一の溫籍にして、而して此の涕淚が死にし友人に代りて吾が心底の慾望となりき。

第五章

涕淚は何が故に苦む者に甘美なる乎。

嗚呼神今日に於ては一切の此の悲哀は久しき昔過ぎ去りぬ。時は全く吾が傷痍を痊やせり。願くは我眞理なる爾に就て學ぶことを得んことを、涕淚は何が故に哀む者に甘美なるかと云ふことを。爾の我に漏したまふやう、爾の唇に吾が心耳を安くとを得んことを。又我然く考ふべき乎、爾在さゞる所無しといへ、一切吾人の禍難を爾の前より遠けたまふと。爾は自ら保ちて變ること無し、吾人人類は經驗の潮流の上に浮沈す、然も吾人の悲歎を爾聽きたまふに非ずば、吾人の希望は全く滅せんのみ。然らば吾人が人生の苦味の中より、呻吟、流涕、嘆息、不平の甘美なる果實を、如何にして選び分つ乎。吾人、爾の聽きたまふことを望むが故に、悲歎が然く甘美なる乎、祈禱に於ては正に然り、茲に於て

は吾人は爾の耳に達せんことを切望すればなり。然れども是は吾人の悲哀、又當時我を仆したるが如き悲痛に就ても亦果して然る乎。友人が我に還り來るべき何等の希望を我が有せざりしと、我が哭きし間にも我が之が爲に爾に祈らざりしことは確かなりき。我徒哭き哀みぬ。蓋は我は不幸なる者にして、吾が歡樂を喪ひたりし故なり。又は單だ苦痛が哭きつゝある乎、而して其の苦痛が、吾人の一たび樂みし事物を厭ふ故に、又は吾人が之を厭ふ間のみ、唯吾人を樂ましむる乎。

第六章

彼其の友人の死せし爲に如何なる沈痛を受けし乎。

然れども我は何が故に斯く煩しく語らんとする乎、蓋は我が爾に告白しつゝあるに當りて、此かる疑問を解くべき遑あらざればなり。我は

實に不幸者なりき、人皆其の必滅者を愛する愛の爲に繫がれたる間は不幸者なりとす。離別の哀の爲に腸を斷たれて、其の靈魂始めて其の不幸を感ず。而も其は離別の起る前に、茲に伏在せるものなり。當時に於ける我正に然りき。我痛く啼き悲み、其の苦痛の內に溫籍を發見しき。然く我は不幸者なりき、而も我が不幸生涯は其の我が爲に懷しきこと、吾が友にも勝りて然りき。我此の生涯を喜んで變へたるべけれど、我は寧ろ吾が友人を奪はるゝことを欲せざりき。小說(或は假作なる乎)はオレステスとピラデスなる二人の者が、相互の爲に、又相偕に如何に喜んで死せんとせしかを語る。彼等の爲には、離別が死より惡ければなり。是に於て我自ら疑はざるを得ざりき、我果して吾が親友の爲に己を獻ずることを得し乎と、唯當時異樣の感覺正に吾が內に起り、全く前と異りたる方向を指點したるを記せり。他なし、我生を疾みしなり。尙且死を怖れたりき。我今にして思

ふ、親友に對する吾が强烈なる愛は、彼を我より奪し死を、憎ましく、恐ろしく、俱不戴天の讐敵の如く見えしめしとを。然れば我當時思へらく、死は日ならずして有らふる人を殺すべし、蓋彼既に彼を殺したればなりと。此の如きは吾が當時の思想の結構なりき、我明かに之を記せり。然り我明かに之を記せり、嗚呼吾が神よ吾が心の内を見、吾が隱れたる思念を鑒みたまへ。嗚呼吾が「望」よ、我が不潔の愛情を淨め、吾が目視を爾に率き着け、吾が足を係蹄より引き出したまふ者よ、我が心驚異に勝ずして曰く、我が決して死すべからざる者なるかの如く愛したりし其人、若く死にし後、世の人々の猶生けりとは、更に驚異に勝へずして曰く、彼若く死し際、其の半身なる我さへ猶も生けりとはと。宜なる哉詩人が己の友人に就て曰ひし言や、曰く、「嗚呼爾吾が靈魂の半身よ」(一)と、蓋は我吾が靈魂と彼の其と、兩體に在つて惟一なりしを感せし故なり。生は我に取つて恐しく見えたり、我の兩斷せられし故なり。何が故に我

死を懼れしか、是は恐らくは我が然も愛せし其人の半身「即ち自身」が滅亡せんことを懼れしが故なるべし。

(一)原注、羅馬の詩人ホレースの短歌中の一句。

第七章

彼不斷の悲哀の爲に轉居せり。

人相愛せざるべからざるに當りて、人を愛することを知らざる、是は抑も如何なる喪心ぞや。人類普通の運命に逆ひし所の我、實に其の痴人なりけるなり。是故に我且慨ほり、且嘆き、且哭き且懼れたり。我運ぶの要なき、搔き劈かれて生血滴たる靈魂を運び移せり「轉居せしこと」。尙且我は之を安置すべき所を看出さゞりき。樂しげなる樹間に於ても、游獵や唱歌の中にも、花壇の上にも、饗宴の筵にも、書齋の内にも、臥床

の上にも、書籍又は詩文の中にも、何等平安ある無かりき。一切の事物は、日光さへだも暗黑なりき。凡吾が寵者の居らざりし所は、退屈にして嫌忌に耐へず、唯嘆息と流涕ありしのみ。蓋は唯茲の中に於てのみ、一片の慰安を得しが故なり。

吾が靈魂の此の慰安を享くる能はざる時に當つては、不幸の重負我を壓倒しき、嗚呼主よ能く之を減し、之を除く者は唯獨爾ある耳。我固より之れを知りき、然も爾を喚ぶ意志も勇氣も有らざりき。蓋は我爾を現實なる又實在なる者と思ふ能はざりし故なり。吾が神は爾に非ず、唯虛しき空想なりき。吾が虛妄是れ吾が神なりしなり。若徒爾なる虛罔の上に吾が重負を卸さんと試みなば、是は虛無を通して己を滑らせ、己を壓倒すこと前の如けん、我は依然として己の爲に牢獄なりき。我茲〔牢獄即ち自己を指す〕に生くる能はざりき、尙且我は茲より遁るゝことを得ざりき。蓋は吾が心、吾が心より遁れて何處に往くべき乎。

我己を脫して何處に往くべき乎、我何處に己を追ふべからざりし乎。其にも拘らず、我吾が鄕國を遁れ立てり。蓋は彼を見るに慣れざりし處に往かば吾が目の彼を哀慕すること少からんと思ひし故なり、我是に於てタガステをカルセージに去れり。

第八章

時と、朋友との轉換とに由りて、彼の悲哀減殺せらる。

時は嘗て怠ること無し、其の過ぎ去ること亦著しからずとせず、時は吾人の五官を通して驚くべき變化を心に起す。見よ時は一日一日來りて去る、其の來りて去る每に、吾が內に他の思想と他の記憶を落し、漸次我を補綴するに久熟の趣味を以てし、之を以て吾が悲哀を放逐せり。且夫新き悲哀若くは新き悲哀の原因、交も起つて前者に代る。吾が悲

哀の吾が心を貫きしこと如何にして若く容易に、將又若く深かりしそ乎。是れ唯我が必死の人を死なざらん者の如く愛して、吾が靈魂を、水を砂子に注ぐ如く注ぎ出せし故なり。我新き朋友の慰安に由つて、最も大なる蘇息を得たり。彼等は皆我と俱に我が爾の代りに愛せし者を愛せし輩なり。我が爾の代りに愛せし者とは、彼の巨大なる戲作、倦厭すべき欺罔、吾人の耳底に痒を感せしむる所の、彼の戀愚なる智慧を操ぐり且つ惑はす所のマニ教なりけり。

然れども其の戲作は吾が朋友の一が死にし後にも死なざりき。蓋は朋友の交際に於て吾が心を魔しゝ者は全く之と異りたる事物なりし故なり。即ち其は會話、破笑、丁重なる相互の尊敬、能辯の大家に就ての共同研窮、時には莊敬に時には輕浮なる伴侶、恰も己と矛盾する人の矛盾の如き、何等の刺激をも留むること無き矛盾、同感の平板を調理する所の不和の香料等なりとす。各自に順番に、或は教へ、或は聞き、不在者

は必ず慕はれ、出席者は必ず歡迎せらる、大凡此等交友の心情より起り若くは言語、視瞻、顏色に顯はれ、若くは千の美しき禮讓に見はるゝ此等の兆候は、諸の靈魂を相結び、多數を一體に合はする所の熱度を供ふ。

第九章

人間の交際に就て、及び神に在つて生くる者の幸福に就て。

此の如き、是れ我が交際に貴む所の者なり。而して吾人の之を貴むの甚しき、若愛に答ふるに愛を以てせず、此等善意の表證より、寧ろ個人の利益を求むるが如きあらば、其良心慚ぢて自ら詛ふに至る。是故に歡樂、辛苦に變ずるに當りては、奪はれたるとの沈痛と、悲哀の暗黑と來る。而も心は落涙に由りて和らぎ、垂死の落命は永生に至るの死なるに滿足す。嗚なる哉爾を愛する者や、福なる哉爾に在りて其の友を愛し、爾

の爲に其の敵を愛する者や。唯「彼」のみ己の親しき者を一人も失ふことなし。人皆「彼」に在りて此人と相親しむなり。「彼」は自ら永久失はるゝこと無き者なり、然り而して此の「彼」とは天地を造り萬物を之に充しゝ所の吾人の神ならずして誰ぞや、蓋は彼充して以て天地を造りたればなり。吾人若自ら爾を棄つるに非ずば、決して爾を失ふこと無し。若吾人爾を棄てば、吾人は其れ安に往き安に飛ばん乎。然り唯爾の愛より、爾の赫怒に趨るあるのみ。爾の律法は吾人に臨める其の刑罰に由りて極めて甚だ明かなるに、吾人安に往きて之を見遣さんとする乎、爾の律法は眞理なり、爾は即ち眞理なり。

第十章

所造物は無常なり、其中に何等安息あること無し。

嗚呼萬軍の神よ、願くは吾人に返りて爾の顏を示したまへ、然らば吾人は救はるべし、蓋は人の靈魂苟も自個に返る場合には、若爾に執着せずんば必ず悲哀に執着するなり、然り彼「靈魂」は爾の外又は己の外には何等か最も美なる物を尋ねて之に縋がり附く者にはあれど。尙且大凡生あり死ある物、爾より出で來りしに非ずば、世には何等美なる物なし。夫萬物は生により始めて有り。次で長じて全盛に向ひ、其の全盛に達するや否や忽然として老い衰ふ、萬物若く老いゆき、萬物若く衰へゆく、其の生るゝや「有」に向つて開展す、其の成熟すること速なれば、其の「非有」に向ひて退散すること亦速なり。彼等の天法是の如し、爾は若く萬物を律せり。蓋は彼等は部分にして、一切が同時に具在するを得ざればなり。唯其れ來去して以て全體を發揮す、彼等は此の全體の部分たるなり。見よ音聲の符號より成立せる吾人の談話すら正に然るを。此の談話は一言一語に其の部分を發表して、處を他の部分に讓る爲に、且

顯れ且消ゆるに非ずば、充足するを得ざるなり。

嗚呼全體の創造者なる神よ、此の無常迅速なる現象の中より、吾が靈魂をして爾を讃美せしめよ。然れども吾が感覺をして俗情の漆膠を靈魂に固着せしむる勿れ。蓋は此の世界は非有に向ひて其の道を馳せ居る故に、靈魂が己の熱望の爲に劈かれんことを恐るればなり。彼〔靈魂〕は世界の停住せんことを欲し、己が愛好する物に固く安息せんことを渴望せり。然れども此の世界には何等安息の地あること無し、蓋は其の停住せざるが故なり。世界は馳す、誰か感覺の眼を以て之に追隨し得ん乎。誰か世界が己に接近したる時といへども、能く之を了解するを得ん乎。感覺の眼は遲鈍なり、蓋は其の感覺の眼にして、感覺が其の限界なるが故なり。是は能く其の本分を充すを得、然れども世界が其の定まりたる發端より、定まりたる終局まで馳するに當りて、之を駐むる能はざるなり。蓋は萬物は爾の創造力ある〔言〕の、〔其處より此處まで〕と云へるに由りて、各其の運命を聽取せし故なり。

第十一章

所造物の不安と神の不易なること。

嗚呼吾が靈魂よ浮き立つ勿れ、汝の虛榮心の音響をして、其の心耳を聾せしむる勿れ、汝愼みて吾が言を聞け、彼の〔言〕自身汝を喚びて返れと曰へり。彼に於て動かざる安息の地あり、此處には棄つることなき愛あり、又棄らるゝこと無き愛あり。見よ現世にては一物去つて一物來る、而して此の最下等の全體〔世界〕が、其の一切の部分の連續に由りて造らる。然れども〔神の言〕は此く云へり。「我豈に去ることあらん乎」と。此の上に汝〔靈魂〕の家を建て、此の上に汝彼より受けし財を貯へよ。嗚呼諸の虛罔を以て終に疲れ果てたる吾が靈魂よ、〔眞理〕が汝に與へし物を〔眞理〕

に委ねよ、然らば汝は何等失ふ所無かるべし。汝の萎める花は再び開き、汝の病は痊やされ、汝の不安なる慾望は再造せられ、更新せられ、支拄せらるべし。此等慾望は人墳墓に寢ねたる汝を棄つることなく、永劫安住する神の前に永劫汝と安住すべし。

汝何が故に其の肉に役(つかへ)んとて頑梗なる乎、寧ろ何ぞ肉をして反りて汝に役へしめざる乎。汝が肉に由りて感ずる所は部分なり、其の肉が部分として屬する所の全體を汝は知らず、然も尙其の部分が汝を喜ばしむ。然れども若汝の肉情が其全體を掴み得ば、若汝の肉情が、汝の受けたる刑罰として、正當に全體の一部に撿束せられずば、汝は其の全體を愛せんが爲、現世に於て存在せる一切庶物が消滅せんことを欲望すべし、蓋は汝は我今汝に言へる事をすら、同一肉情に由りて之を聽き、尙且同一言辭の永く停住するを欲せず、否反りて其の言辭の代謝し去りて、全體を聞くを得んと欲すればなり〔一切庶物を欲望するの比喩なり〕。

部分の連鎖より成立せる結合に於ても亦然り。若し其の結合を全體として見るを得ば、連鎖〔全體〕は個々の環〔部分〕より更に美なり。然れども吾人の神は更に遙に美なり、彼は萬物を造りし者、過ぎ去さること無き者なり、蓋は何等彼の位置に取りて代る者無ければなり。

第十二章

一切の事物の中、神を讃美するを最も愛すべしと爲す。

若肉體〔他人の肉體〕汝を樂ましめば、其の肉體の爲に神に謝せよ、而して之が創造者に對する汝の愛を反省せよ、恐くは汝を喜ばす者に由りて、汝彼を怒らすべければなり。若靈魂〔他人の靈魂〕汝を樂ましめば、神に在りて之を愛せよ、蓋は此は彼に由りて固く立つに非ざれば肉體と均しく變轉して其道を馳せ終に滅ぶべければなり。然らば則彼に在り

て之を愛せよ、汝の導き得る人を速に彼に導き、彼に叫びて曰へ「彼を愛せよ、彼を愛せよ、彼世界を造りて之を離れ、彼之を造りて之を棄てず、反りて萬物は彼より來り、彼に由りて在るなり。見よ眞理の妙味在る所には必ず彼在り。彼は心の底に住めり、然るに心は彼より迷ひ出でたり。汝罪を犯す者よ、己の心に返れ、而して己を作りし神に根ざせ、彼と共に立て、然らば汝立つことを得ん。彼に在りて安息せよ、然らば汝安息を得ん。汝如何なれば獨曠野に遁れんとする乎。嗚呼是れ果して何が故か、汝の欲望する所は善に在り、蓋は彼より來るが故なり。然ども之を彼自身と比せば何か有らん、是れ善なり、是れ美なり、然れど忽ち苦味となるべし、蓋は所造物を愛して創造者を棄るは不義なるが故なり。

汝猶何日まで此の險岨なる岩根を踐まんとする乎、汝は安息を得べからざる所に安息を求めんとす、汝其の求むる所を求めよ、然れど汝が求

むる物、求むる所に之無きを奈何せんや。汝は死の地に於て樂しき生命を求めんとす、然も其處に其の生命無きなり。蓋は何等生命なき所に生命如何にして樂しきを得んや。吾人の生命彼自身〔耶蘇基督〕、地に降りて吾人の死を負ひ、其の豐盛なる生命を以て死を殺せり。彼萬雷の聲を作して「我に返れ」「此の聖所〔天〕に入れ」と喚ばはり。彼自ら此の聖所より出で來り、先づ處女の腹に入り、茲に自ら吾人所造物なる人身、即ち必死の肉體を受けたり、是れ肉體の永久死すること無らん爲なり。而て彼新郎の房よりするが如く出で立ち、丈夫の如く勇ましく、其の驅塲を走れり。彼唯走りて留まること無く、言語に由り、行爲に由り、死に由り、復活に由り、降誕に由り、昇天に由りて、聲高らかに我に返れと宣べ傳へたり。彼其の吾人の眼より去りしは、吾人各顧みて吾の心に返り、茲に彼に遇はんが爲なり。

彼既に去りぬ、而も見よ彼茲に在り、彼は永く吾人の間に留らざりき、尙

且彼吾人を離れざりしなり。彼天に歸りたり、然も嘗て世界を棄てざりしなり、蓋は世界の彼に造られし故なり。彼此の世界に在りき、彼罪人を救はんが爲に此の世界に來れり。吾が靈魂彼に向ひて告白せん、然らば彼之を醫さん、蓋は吾が靈魂彼に罪を犯したればなり。嗚呼汝人の子輩よ、汝何日まで然く心遲きや、生命は降り來れり、汝昇りて生きざるべけん乎。否、汝は既に昇れり、(傲慢なるを稱ふ)蓋は汝高く昇りて其の面を天に向けたり。然らば汝昇るを得んが爲に降れ、而して後神に昇れ、蓋は「汝は唯彼に立ち面ひて昇りし爲に墮ちたればなり」。嗚呼吾が靈魂よ、人の子輩が此の涙の谷にて哭かん(其の罪の爲に)爲に此事を彼等に告げよ。而て速に己と與に彼等を神の前に伴へ、蓋は若汝が言ふ間にも、愛の火を以て燃されなば、彼の靈に感動せられて、此等の事物を設彼等に向ひて告げさらんと欲すとも得べけん乎。

第十三章

愛の原因。

我當時未だ之を知らざりき、是故に我が愛せし美物は極めて下等にして、愈愛して愈益落ち下りぬ。我が恒に朋友に謂ふ所は是なりき、曰く、「吾人何等美ならざる物を如何に愛するを得んや、然らば美なる物とは何ぞや、何をか之を美と謂ふ、吾人を其の愛する物に牽着する物は何ぞや、若其れ何等か閑雅なる形容を具するに非ざるよりは、毫も吾人を動かさじ」と。而て研究の結果、我は物體の內に注目を値する二個の事物あるを發見せり。一は其の結構の美なり、二は其の適應及び便宜の吸引力なり、例せば部分の全體に於ける、靴の足に於けるが如し云々。此等の思想心の底より吾が胸を衝き出でたれば、之が爲に我は「美」と「適應」と云ふことに就き、二三卷の書を著せりき。其の冊數精確に幾何なり

しや、嗚呼神爾知りたまふ、我今之を遺れたり。我復た之を持たざりき、是は彼に此に失はれたり。

第十四章

彼其の美と適應に於ける著述をヒーリヤスに獻呈せり。

嗚呼神よ然れど我をして此等の著述を羅馬なる修辭の教授ヒーリアスに呈せしめし物は何ぞや、我彼と一面識無かりき、然れど吾彼を愛せしは其高名を慕ひしに由る、我又深く彼の演說の章句の爲に打たれ、親しく之を暗誦したりき。然れども眞の原由は寧ろ他人が彼を讃めて、如何に讃むるも及ぶ無しと曰ひあへるに在りき。蓋は彼本シリヤ人なるに、始希臘文體に習ひ、後羅典語演說に於て優秀の域に達せしのみならず、更に哲學研究に由りて大名を博したればなりき。吾人は甚だ

此の未見の人物を美め且愛しき。此の如き愛は果して說者の唇よりして聞者の心に達すべき乎、不可能なり。一人の愛は他の愛を煽動す、吾人は他に美めらるゝ人を愛す、蓋は吾人其の稱讃の眞情より出るを、即ち其の美むる者を愛する人の口より出るを信ずればなり。此の如きは我が當時人を愛するの理由なりき。即ち吾が神なる何人も欺かるゝこと無き爾の批判に由らず、人の批判に由ることなりき。然れども當時ヒーリアスの聲望は彼の一時著名なる馭者、人氣ある鬪牛者の如きに非ず、其聲望は之より數等堅實にして、我自ら之を獲んと欲望する所の物なりき、而も是れ今安に在り乎。

蓋我自ら俳優を美め之を愛すといへども、我自ら俳優の如く美められ愛せらるゝことを嘗て欲望する無かりき。我若く愛され知らるゝよりは、寧ろ知られず憎まるゝを欲したりき。如何に小き人の靈魂の微孔の中に、此等各種の分銅が各種の傾向を錘る爲に蓄へられたる乎を

見よ〔人各思ふ所ありと曰ふなり〕。若我一物を憎んで〔例せば名譽〕而も我自ら之を避け又拒むことをせずんば、彼我共に人なるに當り、我如何に之を彼に於て愛するを得ん乎〔他の爲に名譽を愛せば、己のためにも愛せざるべからず〕。汝は善馬を愛するに、己善馬となるを冀はずして之を愛し得、善馬たることを能すべきにせよ。然れども俳優の場合は之と異なり、蓋は彼我俱に同性を有すればなり。我が自ら受くるを憎む物を、如何にして彼の上に愛するを得んや。彼我同に人なるを見ればなり。人は如何なる怪物ぞや。嗚呼主爾は悉く彼の髮毛を數へたまふ。其一毫も爾の目に遺ることなし、尙且彼の感情と思想の變動を數ふるに比れば、其の頭の毛を數ふるは遙に易し。然れども我が彼の有名なる演說家を愛するの愛は、我自ら彼と齊しからんと欲望するが如き種類の物に非ざりし乎。然り、是故に我傲慢心の爲に漂泊し去り、浮世を吹く諸の風に搖されたり。然も猶爾の冥導を感せずんばあらざりしなり。我當時ヒーリアスを愛するに、衆人の彼を美むる所の其の天才の爲にせず、寧ろ彼を美むる所の衆人の愛の爲にしたりしことを、今日如何にして我之を知る乎。如何にして之を爾に確實に告白し得る乎。他なし若此等同一の人々が美むる代りに之を非りしならば、彼等が爲しゝ稱讃を、正に非難と輕侮の口吻を以て吾が耳に語りしならば、我は決して彼に對する愛情を煩すべからざりし故なり。尙且天才は同一にして、ヒーリアスはヒーリアスと異らざるなり、唯稱說者の感情變りたるのみ。然らば則ち此の如き柔弱なる靈魂は、其の眞理の巖に根ざす迄、如何に低地に橫はれる乎。世論の風吹來る毎に、彼は翻り又返り、徒に紛糾するのみ。其の光は晦まされ、其の目は眞理を見る能はざるなり。尙且此の靈魂十分に目を見張り居るなり。我謂ふらく、我若吾が文體と學問とを此の名家の眼下に致すを得ば、彼の稱讃が吾が火炎に薪炭を加へ、其の非難が吾が空洞にして危險なる心情を傷

くべしとも、我は大なる成功を博せしなりと。我猶も欣然として我が彼に呈するの好機なりし彼の「美」と「適應」を默想し、何等我が文章家たる誇負を分ちくるゝ者無きに拘らず、獨自ら我が心中の組織ある創作を稱美したりけり。

第十五章

彼何が故に靈の事物を悟る能はざりし乎。

然れども我未だ此の大疑問「靈の疑問」が、幽玄なる事物「靈」を造りし惟一全能の神なる爾の精巧に屬することを知らざりき。是故に吾が思想は徒に有形の物體の中にのみ彷徨したり。我美を其自身に於て美なる者と定義し、適應を其以外の或物に完き關係を有する者とし、兩者に就て實例を擧げたり。我大膽にも心の性質を考察し試みたり、而も靈

的實在に就ける吾が謬見、我を妨げて眞理を見ざらしめたり。眞理は實際、吾が目の上に壓逼し來れり。然も吾が錯愕せし理性は、無形より轉じ去りて輪廓、彩色、容積に向ひたりき。我吾が心に靈的實在を見得ざりき。是故に我謂へらく、人は己の心を見る能はずと。我は善德の平和を愛し、惡德の不和を惡みぬ。前者には我一致を看破し、後者には分爭の一種を看取せり。其の一致を我は條理的智解、眞理、最上善と思惟し、分爭の中に、我は實體的の不條理生活、最上惡を看破せり。此の惡を我は愚昧にも單に其の實體なるのみならず、又生活の一種と主張し、而して萬物の原因なる爾に就て、何等考ふる所有る無かりき、尙且我は一致を一、分爭を二と呼びぬ。彼に由りて無性（セツキスレツス）の智解を意味し、是に由りて暴力又惡慝を意味せり。我言ふべき所を知らざりし故なり。惡は何等實體無く、之に反して吾人の智解は最上、變化なき善に非ざりしことを我知らず又學ばざりき。蓋は憤怒の機能が傲慢、無禮、燥暴な

る時、犯罪の起るが如く、又肉の快樂を慕ふ欲望の制へられざる時、惡事の行爲に現する如く、智解自身が腐敗したる時、過失と妄說と生活を汚濁すること、其の當年の我に於けるが如くなりき。是れ智解自身は眞理の本體に非ざる故に、智解が眞理の分與を受くる前には、其の上よりの光に照らしゝを要すればなり。蓋は嗚呼神爾は吾が蠟燭を點し、吾が暗黑を照すべければなり。吾人は皆爾の充實より受けたり、爾は此の世界に來り凡の人を照す所の眞の光なり。蓋は爾には何等の變化之あるなく、又轉りて顯るゝ影も無ければなり。我一向に爾に至らんと奮鬪せしに、尙且恒に蹶ね返されぬ、吾が智慧死物なりしが爲なり、何となれば爾は傲慢なる者を拒みたまへばなり。

如何なる傲慢、如何なる狂暴が、我は天性神と齊しき者なりなど主張するや。我吾が變轉すべき者なるを知る、蓋は我が智慧を渴望する所以は、我が上達するを得んが爲なるが故なり。然るに尙且我は我が爾と

齊からずと曰はんよりも、寧ろ爾の變轉すべきを妄想するを好みしなり。是故に我蹶ね返へされたり。爾は吾が浮誇なる頑梗を峻拒し、我は物質に就て夢想したり。我肉なるものながら、我其の肉を賤みたり。我は彼の迷へる靈にして、爾に返る能はざりき。我若(しか)く爾の中にも我が內にも、又肉體の中にも在らざる事物を求めて迷ひ出でたり。蓋は此等の事物は爾の眞理の造る所に非ずして、吾が虛妄に由りて物質より案出したる所なればなり。是故に我は忠信なる爾の小き者(質朴なる基督信者)、吾が同鄕人(實は外國人なりき)(互に理解せざるが故に)我之を知らざりしかども)に吾が饒舌の愚を呈露して數問ふらく、「靈魂若神の造る所ならば、其の謬る事あるは何ぞや」と、然も、然らば何が故に神誤るや」と問はるゝことは、我が好まざる所なりき。我主張すらく、吾が變易すべき實體が、正路を離れて邪徑に入ると云ふよりも、寧爾の不變の實體が錯誤すべく約束されぬと信ずる方優れりと、然れば今其の刑罰

として錯誤せしなり。

我が物質の觀念に聾せられて、此等の書籍を書きしとき、殆ど二十六七歲なりき。此間に於ても我は爾の幽玄なる諧音を捕捉せんと吾が心耳を澄したりき。我「美」と「適應」に就て默考し、起つて爾の唇より聞くことあらんことを待望し、彼の新郎の聲（基督、茲には「眞理」）の故に大に歡ばんものと願ひき、尙且自ら己が錯誤の喚呼に魔し去られ、己が傲慢の重負の下に、坑穴に陷りしかば能はざりき。蓋は爾我に、歡喜の聲を聞かせず、吾が骨の歡ぶを許さざりき、我が猶謙遜ならざりし故なり。

第十六章

彼如何に師なくして世間的技藝の書類を解し得しか。

我二十歲に達せし時、吾が手に落ち來りしアリストートルの「十種の

範疇」を獨り讀んで了解せし事が、如何に我を益せし乎。其の著述の題目たる、吾の師なるカルセージの修辭學の敎授や、他の學者が之を稱道して頰を膨らかすに當りて、每に吾が耳に神秘に、又神聖に響きぬ。今や吾が朋輩と此の書に就て語るに當り、彼等均く我に告るに博學の敎師に即き、數回の講義と砂上に描ける圖解の輔翼に由りて、僅に之を解し得たることを以てせり。尙且彼等は此書に就き我が獨學に由りて發見せし所以上に、何等我を敎ふる所無かりき。我明に其が人倫の如き實體に就き、又大凡實體に關する事物に就て敎ふる所を看取したり。曰く性質、即ち人の形體、又分量即ち其の身長幾何、又關係、即ち其兄弟は誰なりや、彼何處に在りや、彼は何處に生れしや、彼立てる乎、又坐せる乎、靴佩きたるや、又武具したるや、彼或る事件を爲せる乎、又或る事件の下に在り乎、我此等の九分科の內に入り來る一切の事物を解し得、其の實例を擧げ示すを得、又實體其自身の階級に來る一切を解し得たりき。

然れども一切此等が我を如何に益せし乎、否是は我を害せしのみ。蓋は萬物凡て此等十範疇に包含されざるべからざることを思ひしかば、神と云へる秘密にして不易なる一體の爲にすら、其の位置を此の十範疇の内に發見せばやと努力し、恰も肉體が其の屬性の奴隷たるが如く、爾も亦爾の偉大と美麗の奴隷なるかの如く思ひ做したり。爾は爾の偉大其物、爾の美麗其物なり。然れど肉體は偉大其物に非ず、美麗其物に非ず、其の肉體なるが故なり。蓋は肉體は比較的に小にして美ならずといへども、肉體は肉體なればなり。我が爾に就て案ぜし所は虛妄にして眞實に非りき、吾が困窮の臆造にして、爾の恩寵の現實に非ざりき。爾地に命じて荊棘を我が爲に生せしめ、又我に吾が面に汗して食を得しめたまへり、其の如く我に成れり。

我自ら接觸し得るほどの謂はふる世間的技藝の有らふる書籍を讀みしことが、俗惡なる慾望の價値なき奴隷なりし我を如何に益せし乎。

我此等の書籍を愛好せり、然れども我此等書籍が其の中に提供するが如き眞理と確證の何處より來りしやを知らざりき、蓋は吾が背正に光に面し、吾が面正に影に對したりし故なり。是故に我が影を見し所の面は、光に接するを得ざりしなり。大凡修辭と議論、若くは形體の廣度、音樂、員數に就き、我を教へ得るほどの書籍は我困難無く輔翼無くて之を學び得たり、(嗚呼吾が神は知りたまふ、此の鋭敏なる智解と、精密なる觀察とは爾の恩賜なることを)然れども我此等の事物を爾に獻げざりしなり、是を以て此等は吾が利益とならず、反つて吾が滅亡の爲となれり。蓋は吾が善の此の如き大部分を、我己の手に握り、吾が勇氣を爾の手に委ねざらんと努めて、反りて遠國に出立して、娼婦の欲望に吾が財産を竭したり(神の恩賜を己が虛妄に濫用せしを謂ふ)。惡用に使はれたる善物に、何等の利益あるべけんや。然も此等の學問は勤勉と敏捷を以てしてだに之に熟する如何に難きかと云ふことを、我之を吾が弟

子に講義せんと努めたる時始めて感知し、吾が講義を追ひ聽くに於て他に後れざる者は、最も聰明なる學生なることを發見したり。然れども眞理なる神よ、我が爾を無限の發光體なり、我自ら其の發光體の斷片なりと思惟せし間、大凡此等は我を如何に益せし乎。是は如何に奇怪なる僻說なる乎。然れども是は我に於て然りしなり。且嗚呼吾が神我今敢て己に於ける爾の慈悲を告白し、爾を呼び求むることを恥とせず、蓋は當時我吾が胃濆(けがすこと)を高聲に唱へ、爾に逆ひて犬の如く吠ふるを恥とせざりし故なり。然らば則ち此の敬虔の敎義に對して怖るべく、賤むべく、又醜かしく、邪徑に迷ひ去れるに當りて、我が人の師の助力を假らずして解說したる難解の書籍や、此等の敎義に對する銳利なる智解が、如何に我を益せし乎。又爾の小者(ちさきもの)が其の寧ろ理解力の遲鈍なるが爲、如何ばかり誤られたりとするぞ。是れ其の故(理解方の遲鈍なる)は、彼等嘗て爾を棄ること無く、偏に爾の敎會の溫かなる巢に安住

し、此の內に在りてのみ健全なる信仰に生長し、此の內に在りてのみ其の羽翼を生じ、慈悲の翼を暢したればなり。

嗚呼主吾が神、願くは吾が望、爾の羽翼の陰に在らんことを、願くは我を守護し提携したまはんことを。爾は小者を携へたまはん、白髮までも爾之を携へたまはん、蓋は爾吾が力にて在します時、吾が力、力たれども、若我己の力なる時は、其力甚だ弱ければなり。吾が善は爾の中に在り、我爾に背くとき、我惡に面へるなり。嗚呼主今又吾が覆へされざらん爲に、願くは我に轉りたまへ、蓋は爾自身か吾人が善にて在しませばなり、是故に吾人の善爾の中に在りて窮ることなし、將又吾人は遲るべき家なきを恐るゝ要なし、吾人は既に家を失へり、然れど吾人の家なる爾の永劫は、吾人が遠かりし間にも失はれたること無き故なり。

第五篇

彼其の二十九歳の事を記せり。彼茲の年に於てマニ教徒ファウストの淺薄を發見して、其の宗派に造詣すべき目的を棄てたり。彼此の年に於て羅馬の修辞學教授に撰任せられ、羅馬より同じ職務を執る爲にミランに遣はされたり。茲にて彼はアムブロースの説教を聞き、俄然其の心眼を啓くに至り、遂に心を決してマニ教を棄て、再び試撿生(カテキユマン)(洗式を受くる準備に服する者)となれり。

第一章

彼其の靈魂を喚起して神に頌む。

主よ吾が舌の手より吾が讃美の供物を接けたまへ、爾之を造りたまへり。又爾吾が靈魂を導きて爾の聖名を稱へしめたまへり。願くは我が凡の骨を痊し、之をして誰か爾に均き者ぞと曰はしめよ。爾を頌むる者自ら己の心に往來する所を爾に告げ示すに非ざるなり。蓋は密(ひそか)なる心も爾の目視を塞ぐこと能はず、將た人の頑梗も爾の手を拒むこと能はざればなり。爾其心に適ふときは或は慈悲を以て、或は譴責を以て、能く靈魂を柔和ならしむ。物として爾の和煦を蒙らざる無し〔恩寵の普遍を稱ふ〕。然れど猶吾が靈魂をして、爾を愛せんが爲に爾を美めしめ、又其の爾を美めんが爲に、其をして爾の一切の慈悲を告白せしめよ。一切の所造物は絶へず爾を美め稱ふ、人の靈は其の爾に向くる所

の己の唇を以て之を爲し、其他の生物と無生物とは、己の事を考ふる所の者の唇を以て之を爲す。是れ吾人の靈魂が、爾の萬物を用ひて飛石となして、萬物を若く奇妙に造りたまひし彼(基督)の許に至り、其の絶望を振り棄てゝ、直に爾の許に翱り至るを得んが爲なり。吾人の蘇息と眞の勇氣とは爾の許に在り。

第二章

悪人は神の前を遁るゝ能はず、是故に彼に返らざるべからず。

不平者、不義者をして爾の前より逃れしめよ。尙且爾は彼等を見、爾の目闇黑を貫き視たまふ。見よ彼等は美なる世界に唯獨り惡く住めり。爾の正義と爾の主宰は天よりして地の八表に及ぶに、彼等は如何に爾を害し、何を以て爾の威能を拒み得たりとする乎。彼等爾の面前より

逃るゝ時に、彼等は何處に飛び去りし乎。彼等は何處に在りて爾の外に身を隱し得る乎。彼等は己を見る所の爾を見ること無からん爲、目を瞑ぢて爾に向ひて趨るが如きこと無からんやう逃げ奔れり。是れ爾其の造りたまひし者を棄てたまはざる故なり。不義者は其の正に苦惱を受けんが爲に、爾に向ひて走り、爾の寛仁より遁れ出で、爾の正義に向いて奔り、而て己の頑梗に陷る。蓋は彼等は實に爾が在らざる所無きを知らず、爾を限る境界なきことを知らず、又爾は爾を離れたる者と共に在すことを知らざりし故なり。

嗚呼願くは彼等が返りて爾を求めんことを、蓋は彼等己の創造者なる爾を棄てたりといへども、爾は己の創造物を棄てたまはざればなり。願くは彼等が返りて爾を求めんことを、見よ爾は彼等の心に在り、爾の名を稱へ、己を爾の心に投じ、其の漂泊に疲れし後、爾の胸に哭く者の心に在り。爾の慈愛の手は其の涙を拭ひ、彼等をして愈哭きて涙の中に

隨喜を得せしむ。蓋は主爾は血肉ある人に非ざればなり。爾は其の造りし者を革新し、慰藉し得る所の主なり。我爾を求めしとき、我自ら何處に在りし乎、我爾の前に在りき。然れど我己を見棄てゝ己を發見する能はざりき、然らば況て爾をや。

第三章

マニ教徒ファウスト、及び所造物を知りて創造者を識らざる所の盲目なる哲學者に就て。

我吾が神の面前に於て、吾が二十九歳の事實を叙べん。當時カルセージにマニ教の一監督ファウストと曰ふ者ありき。彼は惡魔に用ひられたる大なる係蹄にて、其能辯の餌を以て多數の人を捉へし者なり。我亦始其人を推尊したりき。然れども後漸く其の言辭の魔力と我が

熱心求めつゝありし眞理其物とを區別し發しぬ。且我此の高名なるファウストが、我に供ふる食物の種類の如くは、其の器皿の美をば考へざりき。蓋は彼は尊敬すべき一般の學識に達し、特に世間的の學問に熟習したる碩學として大名を博したる者なればなり。

我は從來哲學者の著述を熟讀し、善く其の諸の教義を記憶したりしかば、我其の教理の或者を以て、倦厭すべきマニ教の虛妄と比較し始めぬ。驚くべきは其の蓋然なること哲學者の方面に在りしこと、又彼等の能力の超越せること、及び其の世界に就て公平なる判斷を成し得るに至りし事ども なりき。彼等は唯此等所造物の主宰者を發見し得ざりしのみ。蓋は主よ爾は高く在ませども、卑き者を顧みたまふ。然れど驕れる者を遠に見たまふ。爾は心に悔改めたる者の外、誰をも己に近けたまはず。將又爾は驕る者の爲に看出されたまはず、設令彼等其の穿鑿的技倆に由りて、天の星や海の砂を算へ、星宿の距離を圖表し、天體の

軌道を追跡し得るとも。彼等が此等の事物を研究するは、爾の授與したまひし精神と智慧とに由る。彼等は多數の事物を發見したり、彼等は天上の發光體、即ち日や月の缺蝕の日と時と、其の度とを豫言す。彼等の推測は失たず、其事彼等の豫言したる如く起り來る。彼等其の發見したりし標準を記述したり。是故に其書識まれて今日に至れり。此書に由りて何年、何月、何日、何時に、其の發光體の如何なる部分に於て、日蝕若くは月蝕起るべしと推算せらる。而して其事正に豫言せられし如く成る。

知らざる所の人は驚いて惑はされ、知る所の人は自ら誇りて高く擧がる。彼等其の不虔なる傲慢を以て、爾の光明より缺蝕の影に退去す。彼等は能く日の缺蝕を先見しながら、己の缺蝕を見るの目無し。蓋は彼等は敬虔者の當に爲すべき如く、己が依て以て研究に從事する所の智解の何處より來りしかを問ふこと無ければなり。彼等爾の己を造

りし事を發見するに當り、爾をして其の造りたまひし者を知らしむる爲に、己を爾に獻ぐること無く、將又己より成れる者を爾に獻ぐる無し。——其の高き思想を空の鳥の如く、其の深き思念(此の中に彼等は深淵の隱れし路を沿ひて飛ぶ)を海の魚の如く、其の情慾を野獸の如くに殺せり、——嗚呼神此の如きは燬き盡す火なる爾が、彼等の死ねる憂慮を燒き、之を不死に改造せん爲なり。然れども彼等は爾の「言」なる「道」を知らず。爾は彼(道)に由りて、數ふべき所の萬有を造り、之を數ふる所の人間の、由て以て己の數ふる物を知る所の感覺、其の由て以て數ふる所の智解を造れり。彼等は又爾の智慧の數量なきを知らざるなり。然れども爾の獨子彼自身は、吾人の智慧、又正義、又聖潔とし造られ、吾人人類の中に數へられて、貢をカイザルに納めたまへり。彼等は此の「道」を知らず、謂へらく己天上の星斗の間に光を放てりと。見よ彼等は地に墮ちたり。其の愚なる心晦まされたり。彼等は所造物に就て諸の眞理